

私の体はどうやらナル  
ガクルガになったよう  
です

粉プリン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公がいつの間にかナルガクルガ希少種に生まれ変わっていた物語。 実にご都合  
主義の働く脳内辞書と共に色んな場所でいろんなことに出会う彼女の運命は？

作者の妄想溢れる小説になっていますので肌に合わない方はブラバしましよう。 読  
み終わったら感想を書いてくれるとありがたいです。 他にも誤字や表現の指摘などあ  
れば。

3月18日追記 編集が終わりましたので皆さんからの反応を参考にしつつまた少  
しづつ更新していきます。 不定期になると思いますが今後ともよろしくお願ひします。

目

次

発火	鉱石	二又	怪我	環境	移転	変化	発見	謁見	新天地	確認	
47	43	39	35	31	26	21	16	11	6	1	

神罰	異変	さん	番外編：ある日の溪流のロリルナルガ	曇天	復帰	感染	大戦争	帰還	予兆	毒沼	遭難	迷子
102	97	93	88	85	80	75	70	66	60	56	51	

新大陸	轉機	指南	黑嵐	嵐	極限	超越	混沌	女帝	同行者	逃走	誘拐
159	154	150	145	142	136	132	128	121	117	113	108

# 確認

どうも、突然ですが私はナルガクルガになつていきました。まだそもそも私は誰だつて思うでしようけどね。ナルガクルガですよナルガクルガ、それも希少種。何を言つているか分からぬと思うが、私も何を言つてているのか分からぬ。頭がどうにかなりそうだつた。不慮の事故とか神様転生とかそんなテンプレ物なんかじや断じてない。もつと恐ろしい物の片鱗を味わつたよ……。

(と一ふざけるのはこのくらいにして。何処なんだろここ? 体がナルガクルガに似てるから多分モンハンの世界だとは思うけど。友達と一緒に2ndから4Gまではやつてたけど私下手くそだつたからあんまり上位のモンスター知らないんだよね)

見た目はナルガクルガに似ていたが、よく見ると色が少し違つた。首をひねつて見る範囲内には今出ている月みたいな白く輝く白銀だし、これつて噂に聞く亜種だつたりするのかね? 亜種は黒いのが強いと聞くけどね。それにそろそろこの世界の説明がないとどうやつて生きていけばいいのか分からぬよ……もう疲れたよパトラッショ、ルール説明が欲しい……。

『月迅竜・ナルガクルガ希少種

性格は獰猛で攻撃的。体表の毛で月光を反射させ、更に周囲の霧に潜ることにより背景に違和感がないほど周囲の風景に溶けこむことが出来る』

（…………びっくりした。いきなり頭の中に声が響くなんて、もしかしてこれで念願の脳内オーダーが。まあ置いといて、にしても希少種？ナルガクルガつて希少種もいたんだ。リオレウスとかリオレイアにしかいないと思つてた。しかも透明になれるなんて文字通りモンスターだね。まあそのモンスターになつてるんだけど）

『なお、体細胞から空気中の水分を吸収しそれを霧散されることにより擬似的な霧を作り出すことが可能。また日中の太陽光の反射でも同化することが可能』

（…………これ私のこと？月迅竜関係無いじゃん。水と光あれば光学迷彩モード維持できるじゃん。それなんて光合成？詐欺じやん）

『また、食した物によつて体細胞を進化させ体を文字通り作り変えていくことが可能。これによつて各環境に適応することも可能』

（なんというグルメ細胞、確かナルガクルガつて火が弱点だつたよね？覚えてないけど、だとしたら火山がダメなのかね。希少種がどうかは分からなけど火炎草とか食べてたらいいのかな？どつかのテニスプレイヤーみたいに常時燃焼系になるのは勘弁だけど）

『進化は他のモンスターを捕食した時が一番成長率が高く、逆に植物はそこまで高くな

ない。無論、長期間食べ続けければ進化は十分可能』

（良かつた。私どんくさいからあんまり狩りとか出来なさそうだし。というか面倒だし。というかこの体に違和感感じてなかつたけど、普通いきなり四速歩行になつたら戸惑うんじやないの？もしかして私の順応度高過ぎ？）

『身体能力は通常の希少種よりも数倍の力を持ちこれらも捕食によつて伸ばすことが出来る。また体内器官に特殊な物を持ち通常のナルガクルガには出来ない高度な動きも可能』

（ついに便利な脳内辞書となつた謎の声。ファミチキください。なら私はなぜここに生まれたの？）

『……………』

（自分の脳内ボイスに無視食らつたわ。悲しい…………けど感じちゃう…………とおりあえず行動しよ、ふざけるのも飽きてきたし。動かないとこんな世界じやいつ殺られてもおかしくないですしお寿司）

そう思い身体を起こした。といつても四肢を地面につけて寝そべつた状態から普通の四足歩行に戻つただけどね。どうやら高い場所にいるらしい。こんなエリアあつたつけ？と記憶を探ると辛うじて塔の立つてゐるエリアがあつたはずと思ひだした。確か塔の上から飛び降りれないか試すためにクエスト一つを時間切れにした覚えがある。

(そういえば友達が古龍が倒せないとか言つてたけどここにも出るのかな?)

辺りにはモンスターの気配は無かつた。もしあつたとしたら死んでるだろうけどね。もちろん自分が。

(とりあえずはここを拠点にするとしてお腹も減つたし何か食べ物でも探しに行こう。寝て食べる子は育つ、身長ください)

そう思い立ち今いる広間の端まで来た。今更だけどものすごく高い。どれくらいかと聞かれたら真下の地面が見えないくらいには高い、高過ぎでしょうが……昔の人の建築技術は化け物か……

(確か身体能力は通常のナルガクルガの数倍だけ。ゲームだとリオレウスとか見たいにゆつくり着地じゃなくて飛び降りてたけど、ここから行けるかな? 着地してアシクビヲクジキマシター!!? とかされても困るけどね)

しばらくウロウロしてたが仕方ない。根性で降りてみることにした。男は度胸だ、私女だけど。軽く後ろに下がり、助走をつけてダイビング。風を切つてまっすぐに地面に吸い込まれる。そのまま周りの風景を楽しむ暇もなくそのまま地面に着地した。痛い、文字通りビターンッと腹から地面に落ちてしまった。プールで飛び込みに失敗した時を思い出したよ。

(いつつった……まだ慣れてないのかな。脚が正座した後みたいにビリビリしてる

……お腹なんか中身出て来ちゃいそう……オエ）

着地できたことには変わらないので食料を探しに行くことにした。いつまでもこんなところに居たくないしね。もう嫌、こんなところになんて居たくないわ！死にそう。が、

「おい、どうするんだよ……！」

「落ち着け、焦るな……！」

「そうよ……！まずは様子を探りましょう！」

目の前で三人のハンターの格好をした男女が武器を構え始めた為早くも雲行きが怪しくなってきた。死にそうなのは自分じゃなくて相手側だつたか……南無三。

## 新天地

目の前に敵意を持ったハンターが三人。なかなか危機的な状況だつた。

（ヤバイよ、いきなりハンターにエンカウントとか私の運、低過ぎ？）

どうにか敵意はないことを伝えたいが私はナルガクルガ。当然人間の言葉なんて話せるわけがない。

（こうなつたらちよつとだけビビらせて帰つてもらおう。うん、それにしよう。戦うのはあんまり好きじゃないし）

手始めに体から水分を霧散させて擬似的な霧を作り出した。相手はいきなり視界が悪くなつたため戸惑い始めた。その隙に毛並みで月光を調節して体を見えないようにする。これで相手からはこちらが視認できなくなつた筈。

（それにしてもここまでスマートにやつてるなあ。やつた事無いのに体が覚えてる感じで不思議だね）

三角飛びでハンター達の後ろに回りこむと息を吸い込み咆哮を放つた。ナルガクルガの咆哮はバインドボイス（小）に分類されるが流石に後ろからゼロ距離で聞かさればハンター達も体を硬直させた。

(よしよし、次々)

硬直が解けたハンターが振り向く前にまたその場を離れて死角に回りこむ、そして今度は尻尾を叩きつける。もちろん当たらない絶妙な位置に。ただし衝撃で吹き飛んでいるがそれくらいは勘弁して欲しい。そんな感じでハンターを煽つてると向こうも余裕がなくなってきたようだ。

「おい！」一回撤退したほうがいいんじゃねえか！」

「そうだな……この霧、そして姿を消す。間違いなくナルガクルガ希少種だ。今の俺達が狩れるような相手じやない」

「向こうも様子見してみたいだし退きましょう」

どうやらハンター達は撤退することに決めたようだ。

(良かつた。上手く行つた。このまま何か食料でもあればいいんだけど)

考えながら私は森の方へ飛び立つて行つた。しばらく飛ぶと緑豊かな森に出た。ところどころに川が流れていた。

(ここつて何処だろう？適当に飛んできたからそんなに遠くないとは思うけど……)

さつきみたいな事にならないように今度はある程度まで羽ばたきながら降りたあとに着地した。辺りにはモンスターはいなさそうだ。

(まずは食料確保だね。それからここが何処だがわかるようなものを探そう)

――――――――――

(おおー、あつたあつた)

しばらく木の根元や水辺を探してると木の実や茸を見つけた。食べてみると茸の方はなんか不思議な味がした。だが、問題は木の実の方だ。口に含んで噛んだ瞬間いきなり実が弾けだした。口中でパンパン爆発して口の中がヒリヒリしている。

(さつき食べたのつてはじけクルミだつたのかなあ。あんなに弾けるなんて知らなかつたよ。今度から気をつけなきや)

他にも食べれるものがないか探してると遠くに蜂の巣を見つけた。この体になる前、甘いものが大好きだつた為蜂蜜を見た瞬間駆けだそうとしたが視界の端に青いものが映つたため反射的に姿を隠した。青いのは熊のような形をしたモンスターだつた。

(アオアシラ……)

青熊獣と呼ばれるモンスターで主にユクモの地に生息している。  
(てことはここ渓流だったのか。そんな遠くまで来たんだ)

アオアシラは食事を始めた。私もおこぼれに預かれないかな?と思いつつ、近づいてみた。向こうはこつちに気づいてないのか蜂の巣に頭を突っ込んで蜂蜜を舐めていた。まあ気づいていないならいいやと思いつつ脇に転がっていた蜂の巣のかけらを頂戴した。

甘ーい！やつぱり甘いものはいいね！

そんなふうに食事をしてるとアオアシラが突然逃げ出した。こつちに気がついた？と思つたがどうやら違つたらしい。後ろからバチバチ火花のような静電気のような音が聞こえたからだ。振り返ると二本の短い角に蒼い甲殻と白い毛を生やした狼がいた。（よりによつて本日のモンスター二頭目がパケモンスターですか。やつぱり私の運低すぎじやね？）

逃げようかどうか迷つてると、向こうが飛びかかってきた。仕方が無いためバツクジャンプで躲した後霧を出し姿を隠した。

(そういうやナルガクルガつて遠距離攻撃出来たよね?)

尻尾に力を込めるとなんか刺が逆立つたような気がした。そのまま振り回し勢いをつけて棘を前にぶん投げた。

(……なにこれ？散弾銃？)

目の前一面が棘で埋まっていた。こんだけ撃つたら尻尾がハゲると思ったがどうやら無事のようだ。ジンオウガの方も避けたらしいが幾つか脚に棘が刺さっていた。

(流石だなあ。あの程度じややられはしないだろうしどうしよう)

と突然ジンオウガの体が崩れ落ちた。呼吸も乱れているため何かあったのは明白だ。(えつ? どうしたの急に。もしかして何かしちやつた? ……まさか私の棘?)

よく見ると棘の刺さっている場所から血が異常な速度で流れだしていた。

(もしかして出血とかいう新しい状態異常でも増えたのかな。不味いなあ、無闇矢鱈に殺す気はないんだけど。助けようかな)

とりあえず、刺さっている棘を噛んで引き抜き、近くで見つけた薬草見たいなのを口中で噛み潰した後、舌で傷口に塗りつけた。何してんだゴラア! みたいな目で見られてるけどこれくらい勘弁してよ。応急処置(にもならない)が終わるとジンオウガはふらつきながら去っていつてしまつた。ふらついてたのは血が抜けたから一時的な貧血になつてるだけだと思う。

(私が知らずにやつたことだけど死がないといいな)

## 謁見

昼寝して目が覚めたら目の前にジンオウガがいた。唐突過ぎて、一瞬刃翼で先にやるべきかと悩んだが脚に刺し傷があるのを見て、先程のジンオウガだと判断した。

（良かつた。歩けるくらいには回復したんだ……いやこの状況は良くないけど。なに？復讐？寝てるうちにさくっとやつちまおうって事？）

ジンオウガは全く動かずにこちらを見た。と思うと鼻先を地面に向けた。よく見ると蜂の巣のかけらが落ちてた。ひょつとしてこれを持つて来てくれたの？

（……なんか、勝手に怪我させて、勝手に治療して、その挙句お礼もらうって詐欺じやない？）

蜂蜜は美味しくいただきましたけど。さてと、これからどうするべきか。

（ここ）が渓流ならさつきみたいにハンター達も来るだろうからさつさと戻るかな？お腹も膨れだししばらくは塔で暮らせばいいよね、その後引っ越そう

そうと決まれば長居は無用、さっさと帰ろう。ジンオウガがどこ行くみたいな目で見てるけど帰ろう。

(うわあ……でつかい)

日が暮れる頃に塔に帰つてくると最上階で雷が落ちまくつてた。遠目でも見えるくらいの大きさの真っ白な龍がハンター達相手に戦つていた。

(寝床がなくなつたわ。どうしよう今晚)

すると真っ白な龍がこちらに気づいたのか目だけ向けて來た。

(丁度いい！そこのお前！手伝え)

(えつ？……あつはい)

なんで喋れるの？とか、そこ私の寝床だよね？とか質問はあつたが逆らつたらヤバそ  
うな雰囲気だった為、眞面目に援護しよう。やつぱり格上には勝てなかつたよ。

「おい！乱入來たぞ！」

「嘘でしょ？」

「ギルドはそんなこと言つてなかつたぞ！どうなつてやがる！」

「口動かす暇があるなら手を動かしなさい！」

いつも通りステルスして今回は尻尾で足元をすくうように薙ぎ払つた。三人は避けたが残りの一人が転び、そこに雷が容赦なく襲つた。えげつねえ……ハメ技でしょ。

「大丈夫か！くそつ、一旦退くぞ！このままじや全滅だ」

（私に手を出してやすやすと返すと思ったのか！ここでやられる！）

（ずいぶんハイテンションな真っ白な龍が次々雷を落とす。これじやあ終わらなさそ  
うだからバレない程度に尻尾で怪我人を担いでるハンターを薙ぎ払い出口近くに飛ば  
した。もちろん手加減したよ？）

「チャンスだ！逃げるぞ！」

（どうやら上手く行つたらしく、ハンター達はそのまま逃げていった。）

（逃したか。まあいいだろう。これで私の恐ろしさが十分理解できたはずだ）

（あのー……）

（ああ、お前も助かつた。手助け感謝する）

（あ、いえいえ。ところで貴方は？）

（私は祖なる龍、ミラルーツ。名をアンセスと言う。お前は何だ？）

（えっと、ナルガクルガ希少種です。名前は……ないです）

（すると、まだ生まれたばかりという事か？いや、先程の戦いでは十二分に動けていた。

（單に名前がないだけか？）

言えない、元人間で気がついたらここにいたなんて言えない。

(多分そうだと思います。親も見た事がないので)

(どうか、なら私が名を贈ろう。手助けの礼だ)

(あ、有り難うございます!)

(そうだな……シロとか)

(本気で言つてます?)

流石にそれはネーミングセンスなさすぎだろ。

(冗談だ、月の色に輝く……Luminous。ルミナスはどうだ?)

なんかプリ○ュアに出てきそうだけど気にいつた。

(どうやら氣に入つてくれたようだな)

(はい! 有り難うございます)

ところで一番の疑問だけど

(ここつて貴方の寝床ですか?)

だとしたら出て行くことに高確率でなりそうだが、どうやら違つたらしい。

(違う、私は普段はシュレイド城に住んでる。ここから見る月景色が綺麗でな。偶にここに来るのだ)

(そうだったんですか)

（心配せらずともお前の寝床を奪つたりなどしない。ではさらばだ、また会おう）  
（はい、さようなら）

アンセスが帰つた後いつもの場所で眠つた。  
（雷でぼこぼこして寝辛い……）

# 発見

次の日の朝、起きて昨日と同じく渓流に来てみたらまたジンオウガがいた。たぶん昨日助けたのと同じ子だと思う。考えると向こうもこつちに気づいたらしく口に何かを咥えながらこちらによつてきた。

(……蜂蜜?)

ジンオウガが口に咥えていた蜂の巣を地面に置くとそのまま去つていった。訳がわからないがラッキーだつた事にしておこう。その日は蜂蜜を食べて他にも茸などを食べた後ちよつとした高台の上で昨日と同じく昼寝をした。しばらく寝てると辺りが騒がしくなつてきた。高台の上から覗くとドスジヤギイを筆頭に鳥竜種が何頭もこちらを見てギヤアギヤア騒いでいた。

(五月蠅いから静かにして欲しいんだけど……でかその蜂の巣は何なの? 今朝もジンオウガが持つて来てくれたけどなにか意図があるの?)

聞いても答えてくれない。どうやらアンセスと違つて意思疎通は出来ないらしい。幸いこちらが起きたことに気づくとそれぞれが別方向に帰つて行つた。

(何だったんだろう。この蜂の巣はどうするの? 私に食べると? 嬉しいけど流石に蜂蜜

ぱっかりじや飽きそうなんだけど)

時間も丁度いいから頂くけど。口の中が甘つたるいからなにか刺激物でも食べに行こう。その場から飛び上がりしばらく飛んで小川の側に来た。

(確かハレツアロワナとかそんな感じの魚がいたつけ……どうやつて魚取ろうう?)

今更だが手が大きすぎるため、例え魚を掴んでも持てないし、押さえつけただけでぺちやんこだろう。どうしようか悩んだ結果、誰かが取ったところを少し頂戴することにした。どの道自分じや取れないしそれしかない。なので近くの茂みに隠れ、念の為スティルス状態で隠れることにした。

(……………暇だなあ)

こう、食事の後に麗らかな日差しの下でじつとしてると眠くなつてくる。この体になつてから基本的に食事をする時以外はあまり動かなくなつていた。たまに運動はするがそれも稀なため日中は寝てることが多かつた。その為今回も対した抵抗もなく寝てしまつた。

(……………うつ? 今何時くらい? ……夜だわ、そこまで寝てたのか)

起きると辺りは真つ暗になりもう少しで月がもう空に輝く時間帯になつていた。静けさがその場に漂い、虫一匹いない……いたわ。雷光虫が何匹も飛んでいた。ん? 雷光虫?

(うつそん、またですか)

背後にはお馴染みのジンオウガがいた。しかもなんかバリバリしてた。本気モード  
じやん、戦つてきたの? もはやストーカーなのかと思うが当の本人? にその気はないの  
だろう。現に私の足元にはいつの間にかまた蜂の巣が置かれていた。

(一日三食蜂蜜はやだな流石に。もつと魚食べたいんだけど……取つてくれないかな  
?)

水辺に行きそれとなく魚を掬う真似をするが、じつとこちらを見つめるだけだった多  
分というか絶対わかってないと思う。

(しゃーない、蜂蜜で我慢しよう。好き嫌い言つてられないし)

蜂蜜を食べた後、ふとジンオウガを見るときの水辺を覗きこんでいた。覗くだけ  
で帰つていつたけど。

(私もそろそろ帰ろうかな? でももう暗いし今日はいつもの高台で寝るかな? そろそろ  
引っ越しそうかと思つてたしぶらくこつちにいよ)

~~~~~

溪流にて未確認のナルガクルガを確認。おそらく希少種と思われます。ユクモにナルガクルガ希少種が来たのはおそらく初めての事なので特徴のみ記載して送ります。対象は月色の毛並みをしていて体から霧を出し体色を周囲と同化させることが出来るようです。他にも、このナルガクルガに近づこうとするハンター達から守るようにジンオウガが戦うような場面を目撃しました。これもこのナルガクルガの能力かもしだせん。

### ギルド本部より古龍観測隊に連絡

確認しました。それはナルガクルガ希少種で間違いありません。守るような行為に關しては特に情報はありません。おそらくその個体独自のケースだと思われます。調査や危険度の把握の為上位ハンター用に依頼を発行しました。そちらも観測を引き続きお願ひします。

### クエスト名『月光流星』

#### 依頼者：ギルド本部

クエスト内容：溪流にて未確認のナルガクルガが確認された。本部はこれをナルガクルガ希少種と断定しこの個体の調査を頼みたい。なお、このナルガクルガを守るよう

周囲には大型モンスターの存在も確認されている。ナルガクルガ希少種自体も相当の実力を秘めているだろう。十分に安全を確保した上で挑んでもらいたい。

契約金：350z  
報奨金：7000z

# 変化

ここ数日、この渓流に居を構えてみた（高台で寝ただけが）が、色々と変化があつた。まず朝昼夜に閑わらず他のモンスターが食糧を持つて来てくれた。そしてジンオウガが魚を取つてくれたのだ。ドスジヤギイが吠えているところに現れて魚を置いてくとそのまま去つていった。後ろ姿が格好良くつい惚れそうになつたが、よく考えるとそこまで惚れる要素はないだろう。こうして飢えることはなくなり有り難いのだが流石に毎日持つて来られると自分の体力諸々も低下すると思い朝昼は自分で狩りをしている。ここ最近は肉にも手を出していた。といつてもガーグアやケルビだが。はじめはグロテスクだつたが食べているうちになんとなく慣れてきた。この体になつたことで価値観なども変わつたのだろう。殺しに関しても重たく捉えることはなかつた。だがそうすると皆が持つてくるものが溢れる為それとなく首を振るなどして伝えてみた。結果数が減つたが種類が増えた。茸や魚、木の実にどこから持つてきたのか分からぬ果物まであつた。てか未熟なバナナだつた気がする。誰かがジャングルまで行つたのだろうか。ほんとスマセン。

更にハンター達もやつてきた。一回目は水浴びに川に降りた時に遭遇。すぐにドス

ジヤギイ達が来たためその場は譲った。二度目は昼寝をしている最中に頭に振動が伝わり起きると目の前にハンター達が三人ほどいた。どうやらハンマーで叩かれたらしくずいぶん石頭になつてるのが確認できた。そのご適当にあしらつてるとジンオウガが来て、そのまま私は怪我をしない程度に攻撃してただけで三人共リタイアしていくた。

そして一番の変化が自分の体だつた。ここ最近肉を食べ始めたおかげか筋肉が随分ついた気がする。体が細く小さくなつたのに内側はみつちり筋肉が詰まつていて、体力も相当伸びた。

次に、尻尾の棘に状態異常のようなものが増えた。ブルファンゴを仕留める時に棘を当てたら、血が流れるのではなく急に倒れたと思つたらいびきを搔き始めたのだ。さすがに驚いたが前に脳内辞書が言つてた、食べる事で進化するつているのはこの事だつたのか。他にも麻痺が有るらしくまだ完全に制御出来たわけではないが、ぼちぼちこれは練習するとしよう。

最後だが、毛並みがだいぶ変わつた。これまで月白色の薄青のかかつた白だつたが今は完全に真っ白になつた。そのため目立つてしまふが無い。獲物に近づくときも當時ステルス状態でいないとすぐバレてしまう。最終的にステルスで狩るためにかわりはないが、むしろステルス状態でいられる時間が伸びたためいい練習になつたと言つて

おこう。

(暇だなあ……)

そんな訳で最近は朝起きて軽く運動した後狩りに出かけ帰つて睡眠。昼に起きてまた狩りに出かけ帰つて昼寝。また夜に起きて皆に貰つた物を食べて就寝。と健康なのが不健康なのか分からぬ食つちや寝生活になつてた。

(なんかないかな……と)

なんか地面が震えた気がした。気のせいかと思い目を向けると遠くから何かが走つてきていた。一瞬ジンオウガかと思つたけどジンオウガが走つた程度じや地響きは起らなかつた。第一あれは二足歩行で走つてるからジンオウガではないだろう。(わーお……でつかい)

いたのはまるでジュラ紀の恐竜みたいなモンスターだつた。確か、トモダチについていつた時に乱入クエスト出てきた奴にそつくりだつた。

(何だつけこいつの名前:……い……イジ、イリ……分かんないからゴーヤでいいや)

ゴーヤはこつちを睨みつけると低い声で唸つてきた。舐められてるのか分からぬが食べられる事にはなりたくないので、こつちも咆哮で先に威嚇した。

「GYAAAAaaaoooo!」

(私の咆哮つてこんなに大きかつたつけ? 前はそんなでもなかつたのに。喉の力も強く

なつたのかな？）

咆哮が効いたのかゴーヤがふらついてるが直ぐに感覚を取り戻したらしく結局振り出しに戻った。と思つたらみんなが置いて行つた食料を一瞥した後どこかに行つてしまつた。助かつたがもう二度と来ないで欲しかつた。さすがに今ゴーヤさんに襲われたら勝てる気がしないわ。

古龍観測隊からギルド本部に連絡

先日報告したナルガクルガ希少種についての情報です。前回よりも体色が更に白に近づき、狩りをする時はほとんどステルス状態な為まるで獲物が自殺をしているようしか見えない状況です。また常にナルガクルガの周りにモンスターが寄り付き、食料を与えるという行動を起こし、近づくハンターを撃退する行動が目立っています。最近はイビルジョーの存在も確認出来たためますます危険度が上がりました。

ギルド本部より古龍観測隊に連絡

了解しました。危険度をこちらで考慮した結果、依頼を受けられるハンターをGのみ

に限定する形になりました。また、他の地でこのようなモンスター同士の関係を築くな  
らば危険度が跳ね上がる為これからの方針に注意してください。

# 移転

(そろそろ別の場所に行つてみようかな……)

ここしばらく渓流で過ごしてきたけどそろそろまた引っ越ししても悪くないと思つてきた。渓流の景色に飽きてしまつたわけではないが、流石に四六時中同じものを食べていると食の方で飽きが回つてきた。

(次行くとしたらどこだろうな。個人的に寒いのは嫌いだから凍土とか氷海は後回しにしたいな。とすると選択肢としては熱いところか涼しいところの二択か)

砂漠や火山もいいが、やっぱり孤島もいいだろう。水没林も意外に有りかもしねない。

(よし、次誰が来るかで決めよう。ジャギイ達で孤島、ジンオウガで火山か砂漠、大穴のゴーヤで水没林だね)

と決めたはいい物の誰も来る気配がなかつた。ここ最近は毎日朝と問わず誰かしら来てたのでこうして昼まで誰も来ないのは初めてだつたりする。

(なんかあつたのかな？まさかまたゴーヤが暴れてるのか？)

この間、イビルジョーがまた何気なく來ていたときにタイミング良くジンオウガが来

た。そこから一気に場の空気が悪くなりゴーヤは口から黒い煙を吐き、ジンオウガは体中に雷光虫を纏い始めると言う一触即発状況になつた。その時はさすがに不味いと思ふ一回本氣で咆哮した結果、双方大人しくなつてくれた。

(おつ、誰か来た。二足歩行だし地響きはなつてるし緑だからゴーヤだつたよ。まさかの大穴的中だね)

と思つてた時期が私にもありました。

(でつかい……てかもしかして私つて大型モンスターの中じや結構小さめの方? 回むわ)

やつて来たのは大きな丸目の体をし、尻尾に大きな丸槌を生やして背中にコブをつけたモンスター、ドボルベルクだつた。

(どうしよう。こんな巨体になんか踏まれただけで即終了だよ。なんかこつち見てるし何かしたかな?)

ドボルベルクがこちらの目をじつと見つめると高台の前に居座りそのまま眠り始めた。襲つてこなくて安心したが結局何が目的かわからないため悩みは消えなかつた。(まあお腹も減つたしそろそろ狩りに行きますか。ドボルベルクはこのまま眠りっぱなしだろうし平気でしょ……だよね?)

不安だがこのまま行こう。それに確かドボルベルクは腐つた木とかを食べるし肉食

ではなかつた覚えがあるから、高台にはコケ類しか生えてない岩場だから平氣でしょ。そう思い昼食に向かつた。

――――――  
――――

(そう言えば結局誰も来なかつたけど行き先どうしよう。あそこでドボルベルクが来るなんて予想不可能だし大穴も良い所だつたからね)

食事後しばらく大雜把に考えた末、砂漠に行くことにした。ここでどうにか寒さに対応出来るように体を進化させることが出来れば御の字、出来なかつたとしても暑さに慣れれば火山にも行けるし、ダメならさつくり諦めて孤島か水没林にでも行こう。(そうと決まれば早速準備……するものもないから行こうと思えば今からでも行けるんだよね)

でもしづらくなはここに来ないわけだし、明日の朝に出ることにしよう。今日は最後の渓流だからのがり過ごそう。

(みんな予知能力でも持つてゐるのかな……タイミング良すぎでしよう)

次の日の朝早くに起きた私は朝日を眺めたあと出発しようとしたが、そこにタイミング良く鳥竜種のみんなやジンオウガ、ドボルベルクに更にはイビルジョーが集まり、ちょっとしたお祭り状態になつてゐる。なんか柄にもなく感動して涙でも流しそうだけど、ここで流れられちゃ駄目だと思い直し一気に羽ばたいた。

(絶対にまた来るからねー! 約束するよ!)

聞こえてないだらうけど心の中で大きな声で叫びながら砂漠の方向に向かつて飛び立つ。後には渓流に響くような大合唱をするモンスター達が残つた。

古龍観測隊からギルド本部に連絡

恐れていた事態が起きたため報告します。今日の朝方、突如モンスターが一箇所に集まり始めた後一斉に咆哮し出す事態が発生し確認した結果、砂漠に向かって飛ぶ白い物を確認しました。おそらくあのナルガクルガ希少種だと思われます。溪流はナルガクルガが消えた後、いつも通りの静けさとなっています。巡回ルートを砂漠に移し引き続

き観測を行つていきます。

ギルド本部より古龍観測隊に連絡

了解しました。本部は今回の件で正式に討伐依頼を作成することになりました。改めてクエストの再発行と同時に砂漠に向かうクエストに注意を促し、常にモンスターの行動に気を払うよう呼びかけを継続します。そちらも何か気づいたことがあればすぐに報告をお願いします。

クエスト名『砂漠の白き女王』

依頼者：ギルド本部

クエスト内容：先日まで渓流にて確認されていたナルガクルガ希少種が砂漠へと居を移した。これにより渓流の時同様砂漠の小型大型モンスター問わず、彼らが活発的に動くことになるだろう。これらに十分に注意し白の女王狩れ。

契約金：650z

報奨金：13500z

## 環境

(やつぱり暑いなあ……砂漠だから当たり前だけど、これじや日陰から出たくなるよ)

現在私は砂漠の洞窟の中に寝そべり日が落ちるのを待っていた。容赦なく照らしてくれる砂漠の太陽に私もやられ、こうして日陰で体力を無駄遣いしないようにしているほか無かつた。

(そもそもここつて水分少ないから霧が作れないじやん。選択肢としては外れだつか)

溪流と違い一面砂しか無い砂漠では自分で霧を作れず日が落ちてから試してみるしかなかつた。それまでは目立つて狩りもできない。が、飢える心配はなかつた。  
(おー、ホントに有難う。助かるよ)

溪流の時と同じようにジャギイ達が木の実や茸を持つて来てくれた。ジャギイ達なら溪流にいた子がここにいてもおかしくないと思うけど、さつきはボルボロスが来たしなんか自分が王様のように思えてきた。

(王様じや語弊があるか、自分は女の訳だし。とするとさしづめお姫様……ないな。女

王様つてどこか。憧れてたって言えば憧れてたけどこんな形で叶うとは誰も思わないよ)

日中は動けないため至極助かるが、助かりっぱなしなのも悪いので今度何かしてあげよう。出来ることは限られてるけど。

(そろそろ日も落ちて来たことだしほちぼち動き始めますかなあ)

辺りも薄暗くなつて来たため行動を開始した。まずは洞窟から出て見た。昼間と違ひ冷えるような寒さを感じる。体調を崩すほど酷くはないけど。霧を出してみると問題無さそうだった。ただ足場が砂の為思いつきりジャンプする事は難しそうだった。早くこの土地に慣れないと。

(まずはリノプロスでも狩つて食事と足場の適応だね)

場所を移動しステルス状態で砂漠の真ん中に移動するとちょうどリノプロスを発見した。そのまま気付かれないように飛びかかるとした。その時地面が膨れ上がり、リノプロスの下から巨大な口が現れた。

(ハブルボッカだ……かなり大きいな。私だったら丸呑みできるんじゃないかな? そこまで私も小さくはない……筈)

ステルスを解くといきなり現れた私に驚いたのか潜つてどこかに逃げてしまつた。まあこれが普通の反応だろう。むしろなんの躊躇もなく近づくジャギイ達が不思議す

ぎるのだ。何故ここまで他のモンスターに好かれてるのか分からぬ。

(……他の場所探そう)

だが結局その夜は他に目ぼしい獲物はおらず、日中いた洞窟で朝まで寝ることにした。朝に何か狩れればそれでいいや。

—————  
——

(こうなる運命なのか……)

朝起きて、いざ狩りに出発しようとすると地面からハブルボッカが出て来た。と思えば口からリノプロスの死体を出した。傷が少なく腐敗や消化が始まつてない事から今朝取つてきたものだと分かつたが、昨日やつと普通の子に会えたと思ったらと思うと少し悲しくなつた。

(何故みんなそうなるんだ?これはもう諦めたほうがいいのかな)

何故かは分からぬが私に出会つた出会つてないに閑わらずモンスターが寄つてきて食料を与える。なんかまんま女王様状態だけどモンハンでこんなのがいたつけ?クル

ペツコがそれっぽいけどあれは同じ鳴き声で誘導してるだけだし……

(……諦めよ。人生適度に諦めが肝心って誰かが言つてたし。これは体質、仕方がないこと)

今はとにかく持つて来てくれたりノプロスを食べよう。腹が減つてはなんとやらだ。

# 怪我

ここ最近この辺りが物騒になつて来ていた。理由としては一つにハンター達が来たことが挙げられる。何故か私を見つけると積極的に絡んで来るようになつた。渓流にいた時は遠くから見るか、適度に腕を測られてるような感じがしたが、今はまさにガチ装備で殺りに来てるようなものだ。おかげで昼寝もおちおち出来やしない。

そしてもう一つの理由だけどこつちの方がやばい。明らかに不味い。色々な意味で。（遠目で見ても分かるのに近くだと本気で怖いなあ……）

自分が寝てる眼の前で黒い龍が二頭、ブチ切れてる状態で立つっていた。先程からハンターが来るたびにこのディアブロス亞種とティガレツクス亞種が戦つていた。といつても突き上げてからの轡き逃げコンボで全員リタイア状態だが。この二頭に関してはハンターが名前を読んでたので助かつたがいい加減ゴーヤの名前が欲しい。いつまでもゴーヤだとそのうち海に潜水しだしそうだ。

（と言うか寝れない原因つて単純に五月蠅いだけなんじや……守つてくれてるし感謝するけどさ）

何が気に入らないのかは分からないがここに来て初めてハンターと戦つている時に

地面と空からこの二頭が現れた。当然ハンター達の方が驚きは大きいだろう。私だって2ndのパケモンスターの亞種と2ndGのパケモンスターの希少種と砂漠のマ王の亞種なんかが同時に来たらゲーム機ぶん投げる自信がある。

(そろそろ日も落ちる頃だし狩りに行こう)

そろそろ食事に出かけよう。こここのところ殆ど動かないから少しは運動したい気分だつた。食事をするだけで体は成長し進化するらしいが、それでも気分的な問題があつた。

(さてと、どこかに獲物はいないかなつと……ハンターかな?でもそれにしては人数多いな)

砂漠の向こうから人影が出てきた。後ろに馬車のようなもので何かを運びながら大人数がこちらに来た。とうやらハンターでもなければ行商人という訳でもなさそうだ。  
(なんか……怪しいな。君子危うきに近寄らずつてね。無視してこのまま食事に行こう)

しかし集団は私が迂回しようとすると明らかにこちらに向けて進路を変えてきた。  
しかも近づいてきた事によつて後ろに積んである物が見えた。

(……おかしいな。私の目が疲れてなければさつきのアレ、檻だよね?あれハンターじゃなくてもしかして密猟?)

なんだかマツハで面倒な空気を感じ取つたが今ここで帰ると住処までついてきそうだつた。

(ここ)であしらつてさつさと帰ろう。そのうち寝不足でぶつ倒れそうだわ)

密猟団は私からある程度離れた場所に着くと後ろの馬車から何かの部品を下ろした。そしてその場で組み立て始め一分もすると形が見えてきた。

(あれどう見てもバリスタだよね。持ち運び式のが合つたんだ。流石にゲームとは違うんだね。というかあれどうしよう。撃ち込まれたら対処出来るのかな? 刃翼で斬り飛ばせるならいいけど)

そうこうしてゐ間に簡易バリスタが完成し槍も装填し終わつたらしい。がよく見ると密猟団の更に後ろから黒い影が二つ程走つてくるのを見て察した。

(すいません、密猟団さん達ご愁傷さまです)

そのまま二頭が暴れまくつて、終わりかと思つたが一人がディアブロスの方に向かつてバリスタを撃ち込んだ。流石に古龍用の兵器を食らつたら不味いと思い、ディアブロスにタックルする形で躊躇としたがここで久しぶりに私の悪運がクリティカルした。

(いつだい!?)

バリスタの先端部分が尻尾の付け根に刺さり尻尾をちぎり飛ばしてどつかに飛んで行つた。流石にこれは痛すぎてやばい。今までまともな怪我したことなかつた身に

とつては部位破壊レベルの怪我は酷く、行動に支障が出るほどだつた。幸い残りの密猟団は片付けたらしくバリスタの破片がそこらに転がつてゐるが。

（凄く痛い……冗談とかなしでこんな痛いんだ。もうゲームで部位破壊狙うのやめよう）

なんとなく千切れ飛んだ自分の尻尾を回収して洞窟に戻つた。

（本当に災難でした。もうしばらく引き籠もろうかな。ああ狩りも出来なかつたからお腹空いたな……自分の尻尾でも食べようかな。美食家さんも自分の体は美味しいって言つてたし）

尻尾を食べると痛みと空腹でそのまま寝落ちしてしまつた。

## 二又

(…………んあ？ もう昼か)

どうやら昨日は尻尾を食べた後に寝落ちしてしまったようだ。それほど痛かつたしハンター達のちよつかいで寝不足だつたのもあるが。とにかく一日ぐつすり寝たおかげで体調も元通りになつたようだし尻尾も一本とも元気にうねうね動いて………

(一本?! 何故増えたし!)

錯覚でも何でもなく真っ白な尻尾が付け根から一本生えていた。昔見たお化け図鑑の猫又に似てる気がしてなくもないけどそんな瑣末な問題じやない。由々しき事態だつた。

(なんて増えたんだ? ……尻尾食べたから? 進化つて遺伝情報すら無視するのか? ナルガクルガに尻尾二つつて……あれ? じゃあ足とか頭食べたら…………)

やめよう。この話題は危険そだつた。つい好奇心からケルベロスやキメラが生まれるなんて怖すぎる。ついでに自分がそれなんて嫌だわ。

(てか尻尾長くなつた? 明らか伸びたよね、前よりも。しかも物凄いくねくねしてるし骨入つてるの?)

少し試してみると若干の伸縮性があつた。しかも砂漠で本気ジャンプをしても尻尾で体制を支えたり、砂に突き刺してブレーク替わりにしたり色々役に立つた。目立ちもしたけど。

(これハンターにますます目付けられるよね……とほほ。私は静かに暮らしたかつただけなのに)

それからは主に尻尾を使つて行動をした。尻尾で狩りを行つたり食事をしたり、早く慣れるために大体の事は尻尾で済ましてきた。その為砂漠内のいろいろな場所に行つた。その結果

(なんでドスガレオスがここにいるの? ここってユクモ寄りの場所だよね? ポツケはそこそこ遠いと思うんだけど……)

何処から自分の情報が漏れたのか知らないが色んなモンスターが近頃やつてきていた。昨日はモノブロスがいたし今日はドスガレオスだ。正直私の元に来たつてなんの恩恵もないのに何でここまで集まるのか皆目検討もつかない。

(しかも例の如く持つてきてるし。デルクス持つて来たのつてこの子だよね? ジャあ胴体のど真ん中に風穴開いてるリノプロスはモノブロスか)

まるで女王に対する供物みたいだがいいにく自分はそんなことする気は無いから渡されても困るだけだ。最近は余った食料をジャギイとかに上げてるがそれでまた持つ

て来られちや減るものも減らない。

(また引っ越すかな……この暑さも慣れたしそろそろ火山とか言つてみようかな)  
正直これ以上モンスターが集まつたら確実に大連続狩猟とかが発行されるから一気にハンターが流れこんでくるしそんなことになつたらこら一体紛争地帯なつちやうし。

(明日引っ越しそう……火山では大人しくしてよう)

古龍観測隊からギルド本部に連絡

ここ数日で砂漠に非常に多くのモンスターが集まつてきました。中にはこの地域では見られないようなモンスターまで集まつてくる始末です。このままここに居座られると生態系の崩壊も考えられます。また、ナルガクルガの尻尾が二本に増えるなど対象も非常に進化を遂げていると思われます。至急対策を検討してください。

ギルド本部より古龍観測隊に連絡

今回の件、及び渓流での件を考えた末にこのナルガクルガを新種に判別することを決めました。それに伴い体色や行動パターン、更に他のモンスターに対する組織的な立

場から対象のナルガクルガの識別名を『月迅竜』から『白帝竜』に変更することになりました。そしてこの度対象を専用に観測する隊を発足しました。これまでの結果を白帝竜観測隊に引き継ぎしてください。これまでの観測及び報告書有り難うございまして。

# 鉱石

(あつついなあ……砂漠で慣れて良かつたわ。経由せずにここに来てたら間違いなくぶつ倒れてたわ)

ただいま火山の麓にある森林に来ます。がとにかく暑い。まだ火山までは距離があるのにここからでも熱気が飛んでくるのだから、実際に登り始めたら熱中症とか有り得そう。

(けどここで色々やらないと今度は寒い所に行けないだろうし。寧ろここ頑張ればただ踏ん張りが効かないだけの場所なんだよな。凍土とか雪山)

今回は少し遠出してユクモとポツケの中間辺りに位置する火山を選んだ。と言つてもユクモ側から来たせいか遠くで縦にローリングするのが見える。多分ウラガンキンだと思うから若干ユクモ寄りになつてゐるが仕方ない。

(まずは恒例の食事からだね。砂漠と違つて殆ど砂の大地じやなくて、緑もちゃんとあるから久しぶりに茸とか食べれるわ)

落ちてる僅かな木の実と草食モンスターの食生活とは違つてここなら色々なものが食べれそうだつた。

(まずは麓から探して徐々に上に登つてみますか。ついでにいい寝床も見つけないと)

――――――

――――

(そういえば、鉱石とかは今まで食べたことなかつたけど美味しいのかな?)

試しにそこら辺に転がつてゐる石を食べてみる。スナックみたいにイケるが味がしない。やつぱり鉱石をちゃんと掘らなきゃ駄目か。かと言つても爪はそこまで頑丈でもないし採掘なんてしようものなら一発目で折れる自信がある。やるにしても鉱石食べてからだ。

(そうだ、確か落としたら爆発する岩があつたはずからそれ使えばいいかな?)

記憶を頼りに探すもなかなかそれらしいものが無い。

(うーん、見つからないな。衝撃に弱いなら棘で起爆してだいたいどこにあるかで探そ  
う)

二本の尻尾を回し棘を一斉に前方に飛ばす。一本でも既にショットガン状態だつた  
為今回は前面が棘で埋まつた。と、一部で爆発が起こり壁が崩れた。

(お、ラツキー。一発目で当たつたわ)

爆発が起きた壁を除くと岩の瓦礫の隙間にキラキラ光る鉱石がいくつか転がっていた。

(…………うん。普通に美味しい。じゃがりこ食べてる気分だ)

もつと探すため他にも色んな場所で起爆しては鉱石を食べ繰り返しで初日は終わった。

### 次の日

(…………はいはい、供物供物。もう私寝てるだけの生活をしてろって言われてるのかな……)

起きたら目の前に輝く瓦礫の山が出来上がっていた。がよく見ると全部鉱石のようだ。火山の方を見ると山頂付近で熱線が伸びてたり、上空からブレスが乱射されたり、赤いボールが幾つも壁に体当たりかましてたり、ゴツゴツした斜面をローリングしているのが見えたり。もう軽い運動会モドキだった。

(そこまでして私に何を求めるんだ君たちは。私に神になれと?)

実際にジャギイなんかが襲われているのを見かけたら助けには入るがそれでも偶に

だしそもそもそも関わったことない大型モンスターまで一緒になつて暴れていますから、余計質が悪かつた。

(…………食べよう。もう私は考えることをやめた)

白帝竜観測隊からギルド本部に連絡

白帝竜が火山へと居を移動しました。それに伴い、火山でのパワー・バランスも白帝竜を頂点とする物に変わったようです。また火山頂上付近ではモンスターが活発に採掘をするなどの行為が見られます。中には小型モンスターと協力するなどの面も。火山に近づく際の注意をお願いします。

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。おそらく今までの件から察するに鉱石は女王への供物のような扱いでしょう。また対象の尻尾が増えた事は他のモンスターには見られない独自の進化法の可能性があります。これがどのように作用するかは未知数な為その辺りも観測、お願  
い致します。

# 発火

爪が伸びた。

いや、人間感覺で言つてるが實際には壁を抉れる程に爪が硬化した。それに伴つて爪が成長したのかもしれないが真相は定かではない。何にせよ自分で鉱石が集められるようになつたため運動会（笑）はやめさせた。方法は前にジンオウガとゴーヤの喧嘩を止めたとき同様に本気で吠えるだけ。喉が少し痛くなるけど毎日騒音を鳴らされるよりは百倍マシだ。

（鉱石も美味しいけど、寒い地域に慣れるためにも草食べないと）

今はある植物を探していた。前に食べると体が暖かくなる赤い草を渓流で見つけたが元々そこに生えることのなかつた植物なのかその後は見つけることが出来なかつた。砂漠にはオアシスが一つしかなくそこに赤い草など生えてなかつたため、ここで見つけてないと何気に後がない。ようはその草を食べて体の中に体温を上昇させる器官を持つように進化することができればいいのだ。

（尻尾が一本になるんだからそんくらいは余裕でしょう。でも、肝心の草が見つからないしここにもないのかな。まさか意表をついて凍土に！……とかもなさそうだな。

まずあそこまともに草木があるかすら怪しいし)

今日も成果は無し。こここのところだいぶ暑さに慣れてきたので少し遠出して山頂付近にも足を伸ばしている。もつとも手に入るのは真っ赤な鉱石と他よりもちよつと薄い桃色の硬い鉱石位だった。一度山頂のアグナコトルの巣にお邪魔したことがあるが草なんてどこにも見当たらなかつたため、仕方なく麓で草を探しては鉱石を食べる生活が続いた。

(今日も今日とて草探しか。いつになつたら見つかるんだろう)

朝早く起きて赤い草を探しては食べて、その後に鉱石を食べる。今朝は赤い草が見つかつた為少しだけ残して食べて來た。全て食べてしまふとその場に残らなくなるので見つけた場所を暗記して毎日巡回してゐる。他のモンスターも食べるのかよく失くなつて後悔してゐるが。

(まだそれっぽい器官は出来てなさそうだな。と言うかあんまり体について詳しく知らないし中身なんて増えてても気づくのかな……喉になんか張り付いた、ケホツ)

ボウツ

(…………はあ?)

えつ？なんで今燃えたの？鉱石？鉱石食べてたのが原因なの？念の為もう一度試してみると。

カフツ

ボウツ

（…………ふええ。発熱器官が欲しかったのに発火器官が付いたよ…………）

これは面倒だな。このまま火山を去るかもうちよつとここに居続けて発熱器官が得られるのを待つか……

(そもそも私、さつきまでこんなこと出来る事知らなかつたんだよね。やつぱり体の方は着実に変わつてたんだなあ)

もう少しここに残ろう。もし、かしたら参加の余地が残つてゐるかも知れない。残つてなかつたらさつきと次に移ろう。

111111

1  
1  
1  
1

1  
1

火が吹けるようになつてから数日。最早『火が吹ける』から『炎を吐き出す』になつ

てたが鉱石の力は世界一のようだ。そして実は進化の余地は意外にも残っていた。が、個人的にとてもショックな事もあつた。変化としては尻尾が燃えた。といつても何処ぞのピ○ミンの修造とは違ひ當時発火してゐるのではなく、尻尾を振つた時の摩擦で燃える。尻尾には発火のための器官がライン状に赤く光つて見える為綺麗なのだが。問題は先端部分の毛が焦げたのだ。付け根から中央辺りは平氣だつたが調子に乗つて振り回した後、先端が黒くなつてゐるのを発見した時は軽く寝込んだ。毎日毛並みは綺麗にしてたのに……。

(もう発熱器官は諦めよう……発火器官をどうにかして生活すればいいかな。……次どこに行こう?)

いきなり凍土に行くのもいいがやつぱりここ最近辺境の地ばかりで生活してた為たまには自然豊かな場所に行こう。

(という訳で孤島に出発ー)

羽ばたいて孤島にいざ出発……と思つたら翼の刃の部分が燃えてた。

(そこも燃えるのかよ! あつづ! )

こんな調子で孤島たどり着けるのかな……。

# 迷子

(ここ)何処だろう……森だけど渓流でも孤島でもなさそuddash;。水没林ではないよね。  
水ないし)

飛んでいる最中に刃翼が発火し、しばらくは耐えていたが流石に耐え切れなくなり眼下の森に不時着した。辺りは鬱蒼とした森林で少し進んだだけで迷いそうな感じだ。仕方なく辺りを散策していると一箇所だけ開けた場所があつた。木々が天然のトンネルのようになり行き止まりの天井が崩れてそこだけ光が差し込んでいた。時間もそろそろ夜に差し迫つてきましたしばらくはステルス状態で休憩しよう。

(調度いいしここで寝よう。寝床も確保できだし後は食料と場所の確認くらいかな  
……)

ドンツ

(……? 誰か来たのかな?)

目を開けるが誰もいなかつた。疲れてるのかと思い寝ようとすると頭を叩かれた。

(?!何かいる！誰？)

(やだわあー。そんなに驚かなくてもいいじやない！)

……聞き間違いじやなければ今物凄くアレな声が聞こえた気がする。

(あのー、誰かそこにいるんですか？)

(あらやだ！あたし以外でこんな事出来るなんてすぐいじやない？)

(えーと……)

(あたしはオオナズチのミズハよお！あなたの名前は？)

(えつ？えと、ルミナスです……)

(いやん！かわいい名前じやない！そんなに緊張しなくてもいいのよ同じ透明になれる物同士じやないところであなた見ない顔ね新入りかしらあ？)

(あの……翼を火傷して、ここに落ちちゃって)

(あらあ、翼の方は無事なのかしらん？)

(はい、翼は十分休んだのでもう平氣です。それで……ミズハさんは何故ここに？)

(あたしはランボス達がどこかに行くから姿を消して見守つてたのよん。そしたら貴方

がいるもんだから驚いちやつたわよ！彼ら、何かしたの？)

(いえ！……いつもこんな感じなんです。皆私の為に色々してくれるんです。私は何もしてないのに)

(ふうん……どうやら加護が働いてるみたいね)

(加護……ですか?)

(そうよん! 貴方、ハンター達が石みたいなお守り持つてたの見たことあるかしら? )  
(はい、それでスキルとかが付くんですよね)

(そう、それが加護。アタシ達古龍が本来持つてたのチカラ。アタシは隠蔽の加護を持つてるわよん! 基本古龍はみんな一つ持つてると思えばいいわ)

(じゃあハンター達が持つてたのは?)

(あれは大昔のアタシ達の鱗だつたり脱皮した皮だつたりが時間をかけて結晶化したものね。それなりの時間が経つから加護も元の性質とだいぶ変わるけどそれをハンター達が利用してたって訳! )

(なるほど……でも、私古龍じゃないですね?)

(そなただけ……アナタから懐かしい匂いがするのよねん。誰かにあつたことないかしら?)

(……あつ! 塔でアンセスさんに会いました! )

(あらあの子まだ生きてたのねん! 最近めつきり音沙汰なしだつたから死んじやつたのかと思つてたわん! )

(それで……私はなんで加護を持つてるんでしようか?)

(一概に古龍のみが持つてるとは言えないのよ。何事にも例外はあるようにな! ラージャンの坊やはキリンと同じ雷の加護を持つてるし、シェンガオレンとこの旦那さんだつて古龍じやないわよ。ラオシャンロンとかジエンモーラン見たいに繁栄の加護があるからあそこまで大きくなつたのよ! まあ見たことないからわからないと思うけどねん!)

(じゃあ普通のモンスターが加護を持つことも有り得るんですか?)

(可能性としては十分に有り得るわよん! ..... そうねえ。恐らくだけど貴方には崇拜の加護があるのかしらね?)

(崇拜..... そだつたんですか..... ありがとうございます。自分の力が分かつただけでも収穫あります。今度お礼をしにきますね! )

(お役に立てたのならオールオツケーよん! ところでお礼なら貴方の身体を..... 冗談よ! そんなムキにならなくとも襲わないわよん! )

(.....とにかく、私はもう行きます。教えてくれて有り難うございます!)  
(まだどこかで会いましょうねん! )

（あの子、見た感じだと加護一つじやなさそうね……何にせよこれからは何かあるわね  
……………楽しみだわあ！

## 遭難

ミズハさんに加護のことを聞いたため自分の力を理解出来た。これならいつかはこの力を制御して自分の意志でオンオフ切り替えらることも可能かもしれない。そんなことを考えながら飛んでいたため気付いた頃には私はもうよく分からぬ場所に来ていた。周りを溶岩に囲まれていてまるで火山のようだつたが、火山じゃあんな風に火柱が立つことなんてなかつたからこそは火山とは別の場所なのかな？

（慣れてて良かつた……火山もそうだけどここも十分暑いよ。さつさと移動しちゃおう）

そのまま飛び立とうとすると足元に巨大な氷柱が突き刺さつた。驚いて飛び退こうとしたがいつの間にか氷柱が脚と尻尾と地面をがっちり掴んで固まつていた。

（何者ですかな？ここは私が統べる土地。何人足りとも侵入することは許しませんよ）

溶岩の滝の上から話しかけてきたのは私の何倍もある真っ黒な龍だつた。四足に翼とりーゼントみたいな角が生えていた。話しかけて来たつてことはこの人は会話できる組なんだ。

（あの、ここには迷い込んだだけなんです！別に侵入とか……そういう事はなくして）

(貴方……古龍ではないのになぜ私達と意思疎通が出来るのですか?)  
(えつ?)

寧ろ古龍じやないと意思疎通出来ないの?だからあの時渓流でジンオウガに話しかけても反応なかつたのか。だとしても私は古龍じやないんだよな……あ(もしかして……加護を持つてるからじやないでしょか?)

(加護の存在まで知つてると、一体誰に教えてもらつたのですか?)  
(えつと、ついさつきオオナズチのミズハさんて方が教えてくれました)

(…………はあ、あの方ですか)

(…………何かあつたんですか?)

(こちらを見ては身体をちょっとだけ触らせろ、としつこく……)

すいません、それ私もやられました。

(そうだつたんですか……)

(しかし驚きました。古龍以外で加護をお持ちとは。申し遅れました、私は黒煌龍アルバトリオソ。名前をカドラと言います)  
(私はナルガクルガ希少種でルナミスつて言います)

(ルミナスですか、素敵な名前ですね)

(この名前、アンセスさん……えつとミラルーツさんに貰つたんです)

(あの御方にあつたことがあるんですか! )  
(は、はい! )

（ああ、あの高貴で麗しい身体。全てを見透かすようなあの紅く輝く瞳。そして怒りと共に撃ち放たれる雷！あの方こそ正しく神にふさわしい……）  
（えつと、私そろそろ行きますね？）

（更には怒りと同時に現れる紅い雷の紋様。  
極の美が生み出した）

力強く羽ばたくその姿！どこをとつても究

(すいません有り難うございました!)

これ以上はここに居るとアンセスさんについての話で日が暮れちゃうから悪いけど一人で話してゐる間に逃げよう。出来ればどつちに孤島があるか聞いておきたかつたけどうなつたら勘で辿り着こう。どうにかして辿り着けばいいや。最悪また遭難でもしたら塔に戻つてから考えよう。

白帝竜観測隊からギルド本部に連絡

ここ数日で白帝竜の居場所が不明になつています。火山から飛び立つのを最後にその後は姿を表す事がありません。また見間違えかもしませんが白帝竜が飛ぶ時に翼

から炎が出たり、小型モンスターを食べる際に火を吹きかけて焼いて食べたような形跡が見られます。この食事方法を取るモンスターは火山にはおらず白帝竜が更なる進化を遂げた可能性があります。近隣の町や村に強く呼びかけて広範囲に注意を促してください。

#### ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。火を吹いて肉を焼くと言つた行為は今までではモンスターの食事には見られたことが無いため白帝竜にはある程度の知恵があるかも知れません。また白帝竜のこれまでの移動を追うと次は孤島や水没林の方向へ進んでいると思われます。捜索の際はそちらを探してみてください。注意に関しては既に行動範囲内に存在する街のギルド間で情報を交換し注意を呼びかけています。今後の調査報告によつてはクエストの内容改定も視野に入れています。そちらの情報に期待しています。

## 毒沼

(あれー？私つて方向音痴なのかな？確かに縁のある方に行つてたはずだけど孤島なん  
てどこにもないな)

辿り着いたのはあろうことか沼地だつた。それも夜のだ。空気が生温く湿つていて  
毛先が濡れて元気がなかつた。でも逆に空気中の水分は豊富だから霧は作り放題だし  
そもそもその辺にたくさん漂つてるのでステルス状態は維持しやすそうだつた。

(まずは恒例の寝床探しかな？沼地つて言つたら夜の洞窟は砂漠の夜よりも寒そ  
うだね。発火器官が役に立つときが来たかな)

まずは洞窟を探すとそれらしいものを見つけた。中にはいるとそこそこ広めの空間  
があり、壁に埋まつてる大きな鉱石が光を発して内部を薄く照らしていた。

(ここでいいかな？今日はもう寝て明日はそこの鉱石を食べたら行動再開だね)  
寝る前に寒さを和らげる為近くから薪を持ってきて火を付ける。しばらくしたら燃  
え尽きるだろうがこれくらいなら朝までは耐えることが出来るだろう。

—————

――――――

「おい、大丈夫か？そこに洞窟があるからそこで休もう」

「ありがと。それにしてもまさかフルフルが二頭も出てくるなんて思わなかつたわ」

「全くだな、ギルドも亜種がいるなんて言つてなかつたし最近は狩場の情報があやふやになつてきたな」

「きつと噂のあいつね」

「なんだ？ その噂つて」

「聞いたことないの？ これだから脳筋バカは……結構有名な話よ。ここんところ白いナルガクルガが出てきたつて」

「ナルガクルガは黒と緑しかいないだろ？ 希少種か？」

「元々はそだつたらしいわ。でも今は独自に進化したつてことで『白帝竜』なんて呼ばれてるわ」

「『白帝竜』か……名前から察するに白いのか？」

「そんなの誰だつて分かるわよ。問題なのは周りを常にモンスターが守つてるので『なんだそりや？ モンスターが別のモンスターを守るなんて聞いたことねえぞ』

「だから噂になつてゐるのよ、イタつ」

「平氣か？ほら、ゆつくり座れ」

「有難いわ、薪までつけてくれたのね。氣が利くじやない」

「いや、それ元からついてたぞ」

「そんなわけ無いでしょ。ならここに誰かいたつてこと？」

「かもしけねえな。大方どこかのパーティとバッティングしたんだろう。あつたら挨拶しどきやいいさ」

「そう、それにしてもこの岩ヒンヤリしてゐるわね。触り心地がいいわ」

「なんだよ、俺は地べたに座つてゐるのにずいぶん待遇の差があるじゃねえか」

「私は怪我人よ、それくらい譲りなさい」

「へいへい、火ももうすぐ消えるからさつさと寝ようぜ」

「そうね、おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

(……………んう、朝だ。そろそろ起きるかな)

体を起こして洞窟から出ようとすると何かが自分の体に寄りかかつて寝ていた。見ると男女二人組が薪の近くで寝ていた。

(何でこんなところにハンターが？私これでもモンスターだし向こうは気付いてないのかな？)

とりあえず尻尾でもたれ掛かつてゐる女性の方をゆつくり寝そべらせて外に出た。相変わらず曇つてはいるがステルスをする程度には光もあるため問題なかつた。

(朝は鉱石食べようと思つたけどあの二人もお腹空いてるだろうし肉でも持つて行つて上げるかな。その後どこかで食事してから移動しよう)

ブルファンゴがちようど良くいたので狩りいつものように処理をしていい大きさの生肉を三つほど手に入れた後、洞窟に持ち帰つた。二人はまだ寝てゐるらしく起きる気配が無かつた。肉を一旦置き森で薪を見つけると消えかかつてゐるところに置いて、軽く火を吹きかけた。次に放置した肉の両脇を尻尾で掴んで回しながら火を吹きかけた。しばらくするとパリツとした見た目になりいい匂いが洞窟中に広まつた。二つ目を焼き始めるとながめると外からイーオス達がやつて來た。どうやら匂いに釣られたらしい。まあ普通に生きてれば彼らは肉を焼くなんてことはしないからこれの美味しさも知らない訳だし、少し分けてあげよう。いつもの事だけど。

(もう少しで焼けるから待つて)

言葉は通じてないと思うがイーオス達は一回吠えると洞窟の入り口に走つていった。が、思いの外声が大きかつた為洞窟内で反響しハンターが起きたようだ。

「ん? ここ何処だ……ああ確かに洞窟で……おい起きろ!」

「なんだよ、うるせえ…………何でここにモンスターがいるんだよ!」

二人組は跳ね起きて武器を構えたけど、正直お腹空いてきたからあとにして欲しい。  
(よし、こんなこんな感じかな?)

食べてみると肉汁が溢れてきて素材本来の味がして美味しい。やつぱり生より焼いたほうがいいね。ちょうど、イーオス達も戻つて来た。

(あれ、ドスイーオスも来てる。さつきのは呼びに行つただけかな)

ある程度食べたので残りをイーオス達に上げた。一斉に食らいついてるからすぐなくなると思うけど、まあたまにしか食べれないだろうしいいか。残りを二人の前に置いてそのまま振り返らずに洞窟から出た。

(あつ、鉱石食べ忘れた……まあいいか。今度来たら食べよう)

「…………行つたわね」

「これ、食べてもいいのか？」

「どう見ても、普通のこんがり肉よね。あいつ火を吹きかけてたわ」「どうやら噂の白帝竜とやらは相当強いらしいな……うめえ」

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

こちらで白帝竜の目撃情報を確認しました。対象はつい先日まで沼地にいた模様。急ぎ沼地に向かい対象を発見してください。またハンターにこんがり肉を振る舞つたという情報も上がつてきました。改めて「や白帝竜の危険度の調査を行いたいと思います

白帝竜観測隊からギルド本部に連絡

了解しました。こちらも沼地に現在向かっていますので明日には報告を届けます。

# 予兆

(やつと辿り着いたー！ついに孤島上陸！)

あれから一日中空の旅を続けた結果見事孤島を見つけることに成功した。孤島と言つても潮の関係で朝と夜に一度ずつ海の上に道が出来るが僅かな時間のため殆どのモンスターはここに来ない。空を飛ぶものは別だけど。來てもハンターくらいだ。

(久しぶりに美味しい物食べられる！楽しみだなあ！)

火山や沼地にも茸や鉱石などの食べ物は豊富にあつたけどやつぱりたまには蜂蜜も食べたいし魚とか果物も必要だよね。そうして島の中を巡つてみたがおかしな事に他のモンスターの姿がどこにも見えなかつた。たまにアプトノスらしき影を見るがどちら島の奥や鬱蒼とした森の中に逃げてしまつた。すると岩陰に動くものを発見した。

(あれってアイルー？実際に見ると小さいな。……今は私大きくなつてゐるから比較対象が違うじやん)

アイルーは岩陰にある茸を取ろうとした結果岩のスキマに挟まつたらしくもがいていた。尻尾を下に差し込むとゆつくり上に持ち上げた。アイルーは突然持ち上げられたためびっくりしていたがこつちを見ると何故か首を傾げた。そのまま固まつていた

が納得したのか尻尾伝いに背中に名乗るとペシペシ叩いてきた。

(……なんか便利者扱いされてる気がするのは気のせいかな……)

歩き出すとたまにアイルーが尻尾を掴んで進みたい方向に曲げる。途中から面倒くさくなつたので尻尾の先にアイルーを乗せると顔の近くまで伸ばした。これならいちいち動く尻尾を捕まえようとしないでいいだろう。しばらく左に右に進み、上に飛んだりと繰り返すと木の板で塞がれてる場所を発見した。私の上から降りたアイルーが木の板を何回か叩くとしばらくして仲間のアイルーが出てきたようだ。ちよつとだけ顔を出してこちらを確認すると板を全部外し始めた。

(私も来いってこと? そこ通れるのかな……?)

結果からすればギリギリ通れた。通常のナルガクルガよりも小さかつたため穴は通過できただけど背中が引っ掛つたり刃翼が掠つたりと疲れる穴抜けだつた。穴を通つた先はアイルーの集落らしくそこら中にアイルー達がいた。

(流れで来ちゃつたけど良かつたのかな? なんかみんなこつち見てるし警戒されてない?)

すると一番大きい家の中から変な冠を被つたアイルーが出てきた。

(こんにちわにや。さつきは仲間を助けてくれてありがとうにや)

(アイルーも喋れるんですか?)

(喋れるというには語弊があるにや。僕達アイルーはヒトの言葉を理解するアイルーと他のモンスターの言葉を理解するアイルーがいるにや。たまに両方理解する者もいるけどあくまでたまににや)

(ヒトの言葉を理解するアイルーはハンター達に?)

(そうにや、ハンター達の狩りを手伝う代わりに色んにや取引をしてるにや)

(へえ……じゃあ貴方は他のモンスターの言葉を理解するアイルー?)

(そうにや)

(そなうなんですか……あと、聞きたい事があるんですけど。こここのモンスター達が島の奥とか逃げるのを見たんですけど何かあつたんですか?)

(実はここ最近イビルジョーが來たんにや)

イビルジョー? そうだ思い出した! ゴーヤつてイビルジョーじやん。すつかり忘れてたよ。

(イビルジョーが? でもここつて他にも色んなモンスターが来るしそこまでの事じやないと思うんですけど)

(確かにイビルジョーもたまに来るにや。でも今回のやつは全然違うにや。あいつがいろんにやエリアでモンスター達に何かを探すような指示を出してるニヤ)

(それって誰を探してるんですか?)

(詳しく述べるからにやいけど、葺だつたり魚だつたり、特に蜂蜜のある場所に色んな大型のモンスターがやつてくるにや)

(…………蜂蜜?)

(蜂蜜にや)

(…………それもしかしたら私の知り合いかも知れません)

(にやにや?! そうにやんですか? ならあいつらにもう暴れにやいように一発言つてほし  
いにや! -)

(分かりました……すいません、知り合いが迷惑かけて)

(とんでもにやいにや。それにさつき仲間を助けてくれたしこれでおあいこにや)

(有り難うございます。それじゃあそろそろ行きます)

(またここに来る事があつたらここによつてほしいニヤ! -)  
(分かりました! 必ず来ます! -)

## 帰還

アイルー達の集落を後にして私は島の中を探しまわっていた。蜂の巣があるところや茸が群生している場所に明らかに大型モンスターが来た跡があつたが当の本人達は見つからず結果夜まで探しても見つからなかつた。

(どこにいるんだろう……もうここにはいないのかな?)

イビルジョーは大体何処のエリアにも出るつて友だちが言つてたけど、今はどこだろう。ここにはもういないとして、沼地……は何かぬかるみとかで来なさそう。ミズハさんのがいた場所は多分イビルジョーは知らないと思う。火山と砂漠は蜂蜜なかつたし。

(てことは……渓流に帰つた?)

可能性としてはありえる話だつた。それに久々に渓流に戻つてみるのもありかも知

れない。

(帰つてみますか、渓流にでも!)

(疲れた…….)

そのまま徹夜覚悟で飛び続けた為辿り着いたのはもう少ししたら太陽が顔を出し始める時間だつた。空はまだ暗いがあと一時間もしたら東の方は明るくなり始めるだろう。

(考えてみれば、朝までは一日中飛んでその後に徹夜で飛んできたのか、少しでいいから寝よう。じゃないと体が持たないわ)

いつもの懐かしい高台に着地するとそのまま眠りについた。

――――――

――――――

(…………ギヤアギヤア五月蠅いなあ。もう少しくらい寝かせてよ)

軽く意識が目覚めると下の方で何かが凄い吠えてる。というか下だけじゃなくて溪流全体から聞こえてくる。これは流石に何かあつたのかと思い顔だけ起こすと

(…………なんか増えてない?)

ここを去る直前はドスジヤギイ達とジンオウガ、イビルジョー、ドボルベルクしかいなかつたが高台から覗くとそれにアオアシラやドスファンゴ、更にはナルガクルガの亞

種までいた。ついで上を見ると金色と銀色が太陽でキラキラ光っていた。多分、前にハンターが言つてたりオレイアとリオレウスの希少種だと思う。メツチヤ綺麗だけど（朝っぱらから騒がれるとこつちも迷惑なんだよなあ）

しかも、肝心のイビルジョーはどこにも居なかつた。あとから来るのだろうか。

(けどもう少し寝かせて欲しいんだけど、どうやつて静かにしてもらおう……)

咆哮ですぐ終わるがそうすると眠気も飛ぶのでかわりに二本の尻尾を左右の岩壁に向かつて叩きつけた。適当に音でも鳴らせればよかつたのだけど

ズガンツ!

(.....なんか、我儘で下さいません)

ともかく予想外だつたが静かになつたためもう一眠りすることにした。

白帝竜観測隊からギルド本部に連絡姿を消していた白帝竜が渓流に再び戻つてきました。その為渓流に住むモンスター

達が非常に活発になると予想されましたが、白帝竜が尻尾を壁に叩きつけることによつて自体の沈静化を測つたようです。また観測の結果、各地の鳥竜種が連携をしたり一部のアイルーとメラルーが食料を運ぶといった行動が見られます。このことから白帝竜の勢力圏が多大な範囲に及んでいると思われます。ですので反乱や暴動が起きない内に討伐することを提案します。

#### ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。今回の情報で各地のギルドに白帝竜の討伐依頼を分散させ、より強いハンター達に依頼をかける事になりました。受けることの出来るハンターはG級のみ、またギルドから一人調査隊を派遣する事も含めての依頼となりました。討伐を進めるため、引き続き行動パターンや弱点などの情報があつたら報告をお願いします。

#### クエスト名『女帝の帰還』

依頼者：ギルド本部

クエスト内容：これまで各地で目撃されていた白帝竜が再び渓流に帰ってきた。このナルガクルガは各地を彷徨つたこともあり非常に多彩な進化を遂げた。またエリア内には女帝を守る大型モンスターも複数確認されている。細心の注意を払つてこのクエ

ストに臨んでもらいたい。

報奨金  
契約金  
： 4 5 0 0 z  
： 5 0 0 0 z

# 大戦争

(一つ言わせてもらおう……)

ただいまの時刻はお昼ごろ、久々に蜂蜜を食べながら私は渓流に向かって吠えた。  
 (どんぱち五月蠅すぎるんだよー!)

原因はハンター達と流れ込んで来たモンスター達が渓流のあちらこちらで戦っているからだ。戦いが始まつてから既に三日が経過している。私からすれば適当に歩くだけでハンターにエンカウントするし、ハンター達からすればどこを見ても小型大型問わずモンスターの山だつた。結果、怪獣大戦争のような有り様だつた。  
 (やつぱり色んな所で仲間増やしてると思われたのかな……)

確かに加護の影響で周りのモンスターが私を崇拜するのは仕方ないがこれは止められないのだ。そう、重要なことだがどうやら私の加護はRPGで言うパッジブルスキルの様なもので常時発動してるとと思われるタイプの物らしい。一度塔に帰つた時に運良くアンセスさんには会つたので私の加護の事を聞いたのだがどうやらラオシャンロンやジエンモーランと言つた古龍の繁栄と同じく解除出来ないらしい。(因みにアンセスさんはキリンより強力な雷の加護と少しの繁栄の加護を持つてるらしい)

(だからつて何十人も寄つて集つて来ること無いじやん)

本来狩場では余りパーティ同士が出会う場面は見たことがなかつたが、最近は幾つものパーティが協力して交替しながら攻めてくるので休む暇もなかつた。今までの食事でだいぶ強化されていたため今はまだ余裕があるけど周りはそうは行かないようだ。現にジャギイ達は被害が出る前に巣に逃げていたし、アオアシラなどの中型モンスターはハンターが来れない様な場所に退避して身体を休めていた。

(あんまり戦闘は好きじゃないけど……さつさとやつてまた昼寝でもしますか)



広間の崖の上から覗くと下は酷い有様だつた。そこら中に血が飛び、更には逃げ遅れたジャギイの死体や千切れたジンオウガの尻尾が落ちていた。崖の近くにハンター達が簡易テントを張つてそこで休憩していた。

(これ以上はやらせないから……私のエゴだけど帰つてもらうよ)

尻尾に力を込めて針を逆立たせステルス状態になると崖下に一気に飛び降りた。ハ

ンター達がこちらに反応する前に棘を放つ。流石に鍛えた鎧を貫くほど硬くはないけれど殆どのハンターがかすり傷を負った。そのままバックステップで一旦距離を取るとハンター達が次々不自然な格好で倒れだした。実は前々から練習していた尻尾の棘の状態異常が少し前にようやく制御できるようになった。まあ、狩る時ぐらいしか使うことがないのでそもそも練習自体あまり出来なかつたわけだけど。ハンター達が動けないのでそのまま尻尾の薙ぎ払いでテントを破壊して周る。全てのテントが壊し終わる頃には向こうも痺れが治つてきたようなので一旦ここは退いた。

(とりあえず前線基地は潰したから後は補給線かな?)

この体になる前にやつていたゲームの中に侵略ゲーがあつたためその知識を活かすなら戦いは人員か頭か土地を潰せば勝てると思った。今回で言うなら人員はハンター、頭はおそらくギルドや集会場、そして問はもちろんこの渓流。土地は却下、頭は街にいるだろうから無理。結局やれる事はハンター達にこれ以上はここで狩りを続けることが出来ないようにすること。そのため拠点と補給線を潰せばとりあえずは成功だ。

(さてと、街から渓流に来るには徒步は遠すぎるから……いた)

街から渓流に続く道の脇に隠れること十分程。予想通りに荷台に食料や砥石を載せた荷車が三台ほど間隔を開けてやつて來た。荷車が通りすぎるのを待つてから一番後ろの荷車に狙いを付けてステルス状態で飛び出した。勢い良く刃翼を振ると炎が上が

り抵抗なく車輪を真つ二つに切り裂いた。そのままジグザクに飛んで三台とも斬り裂くと上に乗つていたハンターと荷物は転がり落ち、荷車を引いていたガーブアも衝撃で紐が解けたのか逃げ出した。先程と同じように痺れ状態になる棘を掠らせて動けなくした後、積み荷を一つ一つ燃やしていく。途中、お腹が空いたのと燃やせなかつたので積み荷の砥石を少し頂いた。いつも食べてる鉱石よりは柔らかくて硬いグミみたいな感じだつたため全て食べちやつたけどいいよね。補給線も潰したので戻りしばらく渓流の入り口でハンターの動向を見張つていたがしばらくすると渓流にいたハンター達がやつて来た空の荷車に乗り帰つて行つた。

(やつと終わつたよお  
……………疲れたあ)

体力的には問題なかつたが如何せん久しぶりのガチ戦闘だつたため精神的にはもうクタクタだつた。高台に戻ると何かを食べるのも億劫だつたのでそのまま寝つた。

白帝竜観測隊よりギルド本部に連絡

先日の若輩が独走した白帝竜討伐作戦ですが、結果は失敗に終わりました。作戦前半の周囲のモンスターの無力化はそこそこの線まで行きましたが、その後白帝竜がハン

ター達の仮拠点を襲撃しこれを破壊、また渓流に向かう途中の積み荷を残らず燃やし尽くすという行動により作戦継続が不可能と判断した為こちらの独断で作戦終了を通達しました。今回の件で白帝竜には非常に高度な知能を持つていてると思われます。今後は白帝竜の扱いについて協議する必要があるかもしません。

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

作戦終了の指揮有り難うございます。おかげで被害を最小限に抑えることが出来ました。今回の件、白帝竜の高度な知能、そして作戦の開始と同時に砂漠や火山、その他の地域で一部のモンスターが渓流に移動した事から白帝竜討伐依頼をギルドからの特殊依頼にする事が決定しました。対象はG級でなおかつここ最近の古龍種の討伐実績がある者に限りこちらから依頼する形となります。また、小さな事ですがつい先日バルバレーの地域にいたゴア・マガラの行方が不明になる事件がありました。白帝竜と同じくこちらも危険度の高いモンスターなので情報を流しておきます。

# 感染

溪流での大戦争が終わった次の日、朝から体力回復のために蜂蜜を食べていると雲ひとつない空なのに雷の様なものが見えた。けど多分ジンオウガだと当たりをつけて食事に戻った。

（昨日は尻尾斬られてたのに元気だね……私なんて対して戦つてないのに滅茶苦茶疲れたよ）

やはり元人間とモンスターの根本的な差かと思つたが、雷に合わせて木がドンドン倒れています。ジンオウガは体が大きいため開けた場所で戦うからあそこまで木が折れることはない。即ちジンオウガ以外の雷を使うモンスターが来たという事だつた。

（昨日の今日でまた面倒事持つてこないでよ。只でさえ昨日のことでの他のモンスターからまた食料貰つてるんだから）

実は昨日のハンター達の拠点襲撃を見ていたモンスター（おそらく隠れていたジャギイ達）がいたらしくここに来た時のようにまた起きたら蜂蜜や茸が等の山が出来てたりする。どうやら溪流を救つた救世主みたいな扱いっぽかつたがそこまでの事じやないと思う。言葉が伝わらない為訂正できないし、善意で集めてくれるので無闇に止め

ろと威嚇することも出来なかつた。

(全く持つてチキンです……こんがり肉食べたい)

木が倒れている方に向かうと黒色に輝く蠶を持つモンスターがいた。黒ずんだ黄色の線模様に口から真っ黒な涎を垂らし目が真っ赤に血走つていた。明らかに自我はなさそうで体から毒々しい紫色の血を流して怪我を気にせずやたらめつたらに攻撃を繰り返してはケルビやガーゲアを捕食していた。

(なんだろうあれ……確実にヤバイ奴だよね。あんな見ただけでヤバい物食べたつて分かるモンスター見たことないし。雷を使うのつてキリンとフルフルとジンオウガ以外にいたつけ?……そう言えばミズハさんが前にラージャンの坊やとか言つてた気がするし、もしかしてあれがラージャン?なんか全国のラージャンに悪いけどあんまり会いたくない見た目してるな……)

そこで、ようやくこちらに気づいたのかラージャンがこちらを見た瞬間殴りかかってきた。

(嘘でしょ?!見境なしなの!)

慌ててその場から飛び退いた。殴りつけた地面は小さなクレーター状に抉れ、一発喰らうだけでお陀仏なのは確定的に明らかだつた。  
(ヤバイなあ。まさかこんな奴に会うとは思わなかつたし。体調は完全に回復しきつて

ないし……)

するといきなり前のめりに倒れるとラージヤンはピクリとも動かなくなつた。少し様子を見てから棘を近くに撃ちこんだが少しも反応しなかつた。

(もしかして死んだの？でもなんていきなり……)

その後も突いてみたり、ひっくり返して見るが瞳孔が開きっぱなしなので死んでる事が分かつた。すると突如、ラージヤンの体から黒い煙が立ち昇り始めた。煙はある程度まで上がると辺りに漂い始めた。そこにケルビが一匹やつてきた。すると様子がおかしくなり、先程のラージヤンのように体の色が黒くなり始めた。

(もしかしてあのヤバそうな煙つて病気なの？これつて映画とかで見たことあるけど、パンデミックだっけ？)

だとしたら待つてるのは渓流の生物がさつきみたいに全員暴れ出す未来だ。不味いと思い、咄嗟に火を吹きかけると煙が薄くなつた。どうやら火には弱いらしい。そのまゝ刃翼を発火させて周囲の煙を薙ぎ払つていると煙はだいぶ収まつた。暴れていたケルビもこのままでは渓流に逃げ込んでしまうかもしれないのに仕方なく殺してしまつた。

(後はこの死体だけか……)

このまま残したままだとまた煙を吹き出していつ渓流が墜とされるか分かつたもの

じゃない。かと言つて持ち運ぶことも自分には出来ないし、先程炎で燃やそうとしたが密集した筋肉が邪魔してほとんど燃えなかつた。それにケルビは感染したとはいえ自分が殺したのだ。それなりの方法で弔うべきだろう。この場で出来ることなど一つしかなかつた。

(……食べよう)

せめてもの供養と思い、ラージヤンの腕に噛み付くとそのまま力任せに噛み千切つた。いつも食べている生肉と違つて物凄い苦味とえぐ味しかないが我慢して全て食べ切つた。ケルビも同様に食べ終わると、疲れた体を引きずつて高台に戻つた。

白帝竜観測隊よりギルド本部に連絡

今朝方、渓流の森の中で突如雷のようなものが確認できました。調べたところ、付近のエリアから迷い込んだラージヤンが暴れていた模様。その後近くに居合わせた白帝竜と戦闘中に突然死亡。明らかな短命から察するに激昂状態だった可能性があります。白帝竜はこれを捕食後住処に帰っています。他のエリアから迷い込み白帝竜の勢力に入らなかつた例はこれが初めてなので報告を送ります。

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。こちらで確認したところそのラージヤンはバルバレの地域にいたものが移動したものと断定されました。一つ気になる点としてはこのラージヤンがバルバレから出る際に（激昂状態とは別に）体色が微妙に変わっていたとの情報が送られてきたため、もしかしたらゴア・マガラの狂竜ウイルスに感染していた可能性があります。白帝竜が狂竜ウイルスに感染した場合の被害は想像を超えるかもしれません。下手をすると勢力下の全てのモンスターが一斉に暴れ出す可能性も指摘されています。今後の動向に十分気を付け定期的な報告をお願いします。

## 復帰

（ここ）最近、体調が優れない。残念な事に理由は分かつてゐるし原因は自分だ。おそらくラージャンが掛かっていたあの黒い煙みたいな病気に掛かつたのだろう。体色は変わりないがおそらく目は開きっぱなしだろう。自分でも頭の中に靄がかかりうまく考えがまとまらない時が出て來た。体の中で病原菌が浸食してゐるのだろう。最近食欲がいつもより増えてゐる。いつもなら遠慮していたのに今はみんなが持つて來てくれる物を片つ端から食べてるし、そもそも皆空氣を感じつてゐるのが私に必要以上に寄つて来なくなつた。

（不味いなあ……どうにかこれを直さないと。力技じやあどうにもならなそうだし）  
かと言つて有効な手段を取れるわけでもない。今はとにかく耐えるしか無かつた。

次の日、相変わらず頭がクラクラしてそろそろ本格的にヤバくなりそうになつてゐる時に久しぶりにジャギイ達が現れた。見ると背中にアイルーが乗つていて割とコミカル

な絵面になつてた。

(聞こえるかにや！まだ意識ははつきりしてゐるかにや！)

(……うーん、なんとか：)

(それは多分、ゴア・マガラの狂竜ウイルスにや！これを食べるといいにや！)

そう言つてアイルー達が小さな石ころみたいな物を口の中に入れてきた。正直変化もないしお腹も膨れないで意味がないと思うんだけど……

(これ何……？)

(つべこべ言わずさつさと全部食べるにや！後からもつと来るんだにや！)

それからしばらくは朝起きてアイルー達に口の中に石を投げ込まれ、夜まで寝る。また起きて口の中に、投げ込まれ寝る、のサイクルを繰り返した。そして一週間程すると(完全復活ー！)

(やつたにや！成功にやー！)

モンスターの脅威の生命力で復活した。頭の中も今まで以上にすつきりクリアになつて気分爽快だ。アイルー達に今まで食べさせていた物が何なのか聞くと、抗竜石と言ふらしくどうやら最近になつて人間が開発に成功したものを探しておられたらしい。この時ばかりは本気でアイルー達に感謝した。今度一週間くらい何か手伝える事があつたら手伝つてお

こう。命の恩人だよ。

(ホントに有り難うござります！あとちよつとでもう駄目かと思いましたよ)

(どんでもないにや、それに貴方がいたおかげで孤島でイビルジヨーが暴れなくなつた  
にや！)

(そう言えば最近イビルジヨーの姿見てないんだけどどこにいるか知つてる？)

(さあ……この前まで孤島にいたのは確かにや。その後は僕達にも分からぬにや)

(そつか、有難う…………久しぶりに蜂蜜食べるぞ！最近は鉱石か生肉だけだつたし  
テンション上がるよ！やつほー！)

バチイツ！

(……………)

(……………今、雷かにや？)

(……………私は何も見なかつたし、雷のビームなんて出さなかつた。イイね？)

(あつハイニヤ)

(せつかくウイルスを治したのにまた変なことになるよお！)

(……………ご愁傷さまだにや)

# 曇天

私が電撃ビームを撃つた日から数日後、イビルジョーが渓流に帰ってきた。いや、元々彼のうちがここなのかは分からないので一概に帰つてきたとも言えないが初めてあつたのもここなので帰つてきたと言つておこう。どこに行つていたのかは分からないうが彼?なりに何かあつたのだと思つて納得しておいた。そもそも知り合いがどこにいようが個人の勝手だけど。

(…………そろそろ、また移動してみようかな?)

ここ最近は渓流での生活に慣れてきてるが元々はいろんな場所を見に行く為に塔から出て来たのだし、寒い所に行くために火山で多少違うが体温を下げないための手段も手に入れた。

(…………そろそろ凍土向けて出発しますか)

おそらく今回は長丁場になると思う。割と色々な方角に行つたつもりでいたけど見つかるのは森か草原かたまに砂漠と火山くらいで雪原地帯や氷海は影も形もなかつた。この辺はどうやら温暖な地域みたいだから結構遠出しないと見つからないと思う。ま

あ目的にも元々遠出も含まれてる感じがするから問題はない。

(最近はハンターもほとんど来なくなつたし、丁度いいタイミングかな?)

高台から飛び立ちいつも通り気の向く方向に進んでいると遠くの方で大きな雲を見つけた。どうやら雲の下は広範囲に雨が降つてるらしい。

(もしかしてあの辺りは水没林かな? 向こうはまだ行つたことがないし行つてみよう)

――――――

――――

水没林に着地すると辺りから視線をいくつも感じた。敵意は無いみたいだけどあんまりじつと見られてるのは慣れない。なので姿を消して場所を離れようとしたが

(…………あれ? もしかして透明になつてない?)

空に分厚い雲がかかっているため空からの光が十分に届かずステルス状態が使用できなかつた。

(これは不味い……この身体じや目立つことこの上ないし。早くどこかに隠れよう)

エリア内を歩き回ると丁度いい大きさの洞窟を見つけることが出来た。中に入ると

中もそこそこ広いらしく奥は暗くて見渡すことが出来ないほど深かつた。

(あんまり悠長に外で歩くと面倒だし。ここでいいかな、……いたつ)

暗闇で前が見えず何かにぶつかってしまった。見ようとしても暗くてよく見えないため、手探りで木の枝を集めそこに火をつけた。

(わあ……私出て行つたほうがいいかな? 明らかに場違いなんだけど)

洞窟の中では至るところにロアルドロスとルドロスがいた。中には亞種みたいな色をしている者もいたしここは多分ロアルドロスの住処だろう。と、一匹のルドロスがこちらにやってきた。なんとなく察したがルドロスは魚を口に咥えていた。その後に釣られるように他のルドロスや更にはロアルドロスが奥に引つ込んで魚を口に咥えて來た。

(やはりこうなるのかな。どうにかならないかなあ。それとも、もうなれるか諦めて受け入れるしかないのかな)

改めて崇拜の恐ろしさを実感した日だつた。てか毎日実感してゐる気がしなくもなかつたが思い返すだけ無駄だろうと思い、ルドロス達が持つてきてくれた魚を食べた。



## 白帝竜観測隊よりギルド本部に連絡

ここ最近渓流にいた白帝竜が再び住処を移しました。場所は水没林で、空に分厚い雲がかかつてゐるためステルス状態にはなれないようです。ロアルドロスの住処である洞窟の中に入つた後、出て来たルドロスが魚を咥えて洞窟に戻つてゐることから察するにこのロアルドロス達も白帝竜の勢力圏に入つた模様。驚くべきは以前の白帝竜よりも他のモンスターを従える、または支配すると言つた速度が飛躍的に早まつてゐる点。また水没林内のナルガクルガが白帝竜のいる洞窟の周辺をうろつき始めた点。以上から察するに我々には知覚出来ないモンスターに対する何らかの力が働いてゐる可能性があります。これを解明することが出来れば新しい技術が生み出せるかもやしれません。

## ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。白帝竜が再び動き始めたため各地のモンスターに変化が起きました。小型大型問わず一部のモンスターが一定の場所に食料を貯蔵し始めるという行為を始めてゐるとの情報が入り、今までのことから考えると白帝竜がエリア内に来た際の食料として提供する可能性があります。まだ詳しいことは分かつていないためそちらでも同じような行動が確認できるか観測をお願いします。それと大老殿での会合により白

帝竜を近々古龍種に判別するかも知れないと連絡が入りました。そちらも合わせて連絡しておきます。

## 番外編：ある日の渓流の口リルナルガさん

ある日、渓流でいつものように食事をしていると草むらの影に見たことの無い茸が生えていた。傘が真っ赤で白い大きな丸が等間隔に並び、柄の部分には目のような模様があつた。見たことの無い珍しい茸だつたため好奇心から一口食べてみた。

（なにこれ……凄く不味い……キュー）

そのまま私はあまりの不味さにその場で気絶してしまつた。

気がつくといつもの高台……ではなく茸を食べてそのまま気絶していたのか、草むらに倒れていた。

「うえ…………何あの茸、不味いってレベルじやなかつたよ。もう二度と食べ……？」

人間の声が聞こえた。辺りを見渡してみると特に違和感は……あれ？なんか視線が低くなつた気がする。

「うえ?!」

体を見てみると、いつもの白い体毛が生えた身体ではなく、白いワンピースのような服を着た人間の子供の体だった。ぎこちなく体を動かしながらも急いで近くの川を覗きこんでみると、赤い目をした白い髪の毛の女の子がいた。

「に……人間になつたー?!」

私の悲鳴が渓流中に響き渡った。考えをまとめるために混乱する頭でいつもの高台に戻ろうとするが困ってしまった。ハンターが来れない場所を選んだせいでこの小さな体じやどうやつても高台まで登ることができなかつた。仕方ないので高台の下で今朝アオアシラが持つてきてくれた蜂蜜を舐めてた。手が汚れるがいまさらなので気にしない。するとジンオウガが向こうからやつてきた。近くまで来ると私の姿が変わつてることに気づいたのか、その場で止まりこちらを見つめた。

「えっと、私だよ？変な茸食べちゃつて……あつ、そんな怖がらなくてもいいよ。むしろ私今何にも出来ないし……」

思わずその場に体育座りで落ち込み始めてしまつた。私の姿を見てジンオウガが鼻をこちらに押し当ててきた。

「ごめんね、慰めてくれるの？……ありがとう」

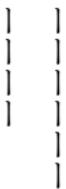
そのままジンオウガが私の足元に顔を入れるとそのまま持ち上げて首に私を乗せてしまつた。

「わあ……すごい眺め！」

ナルガクルガは元々目線が低いため、ジャギイとかとほとんど同じ目線で生活していた。しかも私は他のナルガクルガよりも体が一回り小さいためほとんど地面に近い目線で生活していた。そのためジンオウガの上に乗つてみる景色はいつもと違つて新鮮味があふれていた。ジンオウガは私を乗せたままゆっくりとした速度で渓流内を歩きまわつた。途中でドスファンゴと交代して全力疾走する爽快感を味わつたり、リオレイアの背中に乗つて渓流を眺めながらゆっくり飛んでもらつたりした。

「楽しかつた——久々にこんなに遊んだよ！」

夜は夜で渓流中のモンスターを集めてみんなで食事をしたり、リオレウスの火球とジンオウガの雷玉を空中でぶつけて花火もどきを見て楽しんだり、いつもの身体じや楽しめない一日だつた。寝るときも高台の下にみんなで集まり寄り添つて寝た。みんなが寝るまではジャギイが吠えてイビルジョーが切れかけたり、ドボルベルクの寝相が意外と悪く尻尾で危うく潰されかけたりとハプニングもあつたが最後は近くにいたジンオウガの足元に顔を載せて眠つた。



(て事がこの前あつたんだよ)

(なるほど、モンスターでありながらヒトの身になるとはある意味古龍よりも珍しい経験をしたようだな)

(残念ねえ！あたしもルミナスちゃんの可愛い姿を見たかつたわあ！)

(確かにそれは一見の価値があつたかもせんね。しかしつ！やはりこの世の究極の美はミラルーツ様に決まっています！むしろそれ以外あり得ません！)

(あらやだあ。あたしも十分綺麗じやなあい？)

(黙つてろこのオカマ野郎！)

(だあれがオカマ野郎だつてえ?!あんま調子こくとはたき落とすぞナルシスト野郎！ああ!?)

(ここで暴れるな馬鹿共！)

(ぎやああああああ!!)

(有り難うござります!!)

(…………うん、見事にいつも通りだよ)

# 異変

(うわー……昨日より酷いことになつてない?)

次の日、水没林は土砂降りの雨だつた。雨の勢いが強すぎて霧を出して下に落ちてしまい最低限のカモフラージュも出来なかつた。

(今日は出かけるのはやめておこ)

幸い洞窟の中には鉱石もあり、数日引き籠るには充分なのでこのままここで雨が止むまで入ればいい。ロアルドロス達も魚を持ってきてくれるので特に問題はなかつた。

(その間何してよう……)

ここのこところどこかに移動するか食べるか寝るの三行動しかしてないため、たまに この先生き残れるように何かでできることを考えてみた。と言つてもここ最近の食事で 体の変化は見られないでのまた新しいものを食べる必要があるかもしれない。

(てことはあれか……)

残つてるのはラージヤンを食べた事によつて放つことが出来た電撃。意識して使つたことは無かつたけど今は暇だしちょうど外に出ることもないでのこの機会に練習しておこう。まずは軽く体に纏うように放電してみた。……変化なし。次に刃翼や尻尾

に意識して体を動かしてみた。こちらは手応えありで、目に見える程度には軽い電撃が見えた。最後に口から炎を吐くのと似た感覚で電撃を放つ。……予想以上に出来てしまつた。天井がバリバリ電気を帯びていてる状態になつた。

（電撃で筋肉を刺激してサイヤ人的なことは出来ないのかな？速度が上がればそれだけで手段は増えるけど出来ないなら色々と練習しよう）



（やつと雨も上がつたね。これで色々見て回れるよ）

一週間ほど経つた今日。雨も上がり雲もどこかに行つてしまつたため久しぶりに太陽を見た気がする。外に出ると辺りにフロギイ達がいた。何気に初めて見たけど特に関わるようなこともないのでとりあえずエリア内を歩き回ることにした。

（とりあえず蜂の巣があれば儲けもの、茸か木の実で許容範囲内、鉱石と魚はしばらくはいいかな……）

（というかここんところ極端に同じものを食べ続けた結果、また体が進化していた。そ

れについては今度話すが進化についての軽い方針が分かつたほうが重要だつた。推測だが色々な物を食べるよりは食性を偏らせた方が進化は早く出来る様だ。まだ確定とは行かないがこれはこの先の食事なんかで解明していきたい。と、エリア内を移動してると先の方に何かが落ちてた。

(うわっ…………誰?こんなことするハンターは)

そこにあつたのはドスフロギイの死体だつた。体中が引き裂かれ、明らかに死んだ後も過剰に攻撃されたような感じだつた。更に表面の鱗や皮や牙などのハンター達着素材として使うものは全て例外なく取られていたため遠目にはただの肉の塊にしか見えなかつた。

(流石にこんな殺し方をするなんて黙つてられないんだけど、何処の馬鹿がこんなことするの)

何処かでこれの犯人を知つてるモンスターはいないか考えたけど仮に知つていても私からは意思疎通ができない……いや、ここに住んでいてなおかつ唯一私と意思疎通ができるモンスターがいた。

(それで、ここに来たのかにや?)

(そうなの、何か知つてることはないかな?それっぽい事なら何でもいいんだけど) 急いでエリア内を周り、偶然見つけたイルーの一人に集落に案内してもらつた。こ

この集落は穴を通つて入るのではなく、板の上に草を引いて偽装した穴から降りる形で入るためそこそここの大きさがあり私でも難な降りることが出来た。

（そう言えば、友達が言つてたことだけど最近新しいハンターが別の地域からこの辺りに来たつて噂らしいにや）

（新しいハンターなんて毎日来てると思うけど？）

（違うんですね。友達曰く、そのハンターは本来なら複数人で行うラージヤン討伐の依頼を一人で成功させたらしいにや）

私が戦つたラージヤンはすぐ絶命したためどんな攻撃をするかは分からずじまいだつたけど、少なくとも楽に戦える相手ではなかつたのは確かだ。それを人間が一人で倒すなんて確かにそれは噂にもなる。

（それで？そのハンターについてなにか知らない？）

（そこまで詳しいことは……あつ、でも、聞くところによるとそのハンターは色んな武器を作るために毎日狩りに出かけてはモンスターを必要以上に狩つてるって聞いたにや）  
（必要以上に……）

そんなことを続ければ明らかに生態系の破壊は免れない。それに恐らくだけどその位のことは人間たちの間でも暗黙の了解程度にはなつてゐるはずだ。それを無視してまでモンスターを狩るつてことは何か理由でもあるはずだ。

(分かったよ、情報ありがとうね。それはお礼だよ)

そう言つてここに来るまでに作つておいたこんがり肉を渡した。もちろん私は食べる分だけ狩つてるよ? アイルー達は滅多に食べることのできない物をもらつたおかげで、すっかりお祭り気分になつてしまつたため邪魔をしないように出で行つた。

### ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

緊急事態が起こりました。前の白帝竜討伐作戦を計画した新米ハンターが水没林へ向かいました。恐らく白帝竜が水没林へ向かつたとの噂を聞いたと思われます。彼の実力は現在の全ハンター内でもトップレベルに位置しますが? 同時に非常に難解な性格をし、モンスターは徹底的に狩るため生態系への負担も懸念されています。ギルドからの忠告を無視して飛竜種を乱獲したこともあり一時期はハンター登録を停止していました事もありましたが今回の件は非常に厄介なことになりそうです。彼が白帝竜の勢力内の仲間、もしくは白帝竜自身に手を出した場合どうのようなことが起きても不思議ではありません。最悪渓流で起きた大狩猟の様な事態も視野に入れ、こちらから水没林へ調査隊を派遣しました。そちらからも彼の監視をお願いします。

## 神罰

次の日、水没林を巡回していると遠くで地響きのような音が聞こえてきた。渓流でよく聞こえてきたドボルベルクが木々を薙ぎ倒すときの音によく似ていた。

(そつちにいるのね！今行くわ！)

ステルス状態になり出せるだけの速度で音のする方に向かうと殆ど瀕死状態で倒れているドボルベルクとその近くに立つハンターを見つけた。

「さつさと殺して素材剥ぎとるか。いい加減レア素材落とせつてんだよオラ」

ハンターがドボルベルクの顔を蹴りつけているのを見て、こいつがアイルー達の言つていた奴だと分かつた。正直これ以上は不快だから見てられなかつた。バレンaiように後ろに回りこむのと手加減せずに本気で尻尾を薙ぎ払い、燃え盛る尻尾をハンターの脇腹に叩き込んだ。ハンターは勢い良く吹き飛び森の中に飛んで行つた。ステルス状態を解くとドボルベルクに忠告した。

(よし、今のうちに逃げて)

言葉は分からなくともなんともなく尻尾で押すとドボルベルクに伝わつたらしく脚を引きずりながら奥に逃げていった。

「痛えな！ふざけんじやねえよせつからく作つた鎧が壊れちまつたじやねえか！」

(正直鎧がなんだつて言うんだよ。こちとら仲間の命が無為に消費されるところだつたのに)

本氣で撃ち込んだにもかかわらず鎧に入つただけでハンターの方は特に怪我はない様子だった。流石にこれはおかしいと思う。前に渓流で壁に叩き付けたときは崖が崩れるレベルだった。今はあの時よりも力はついてるため威力も上がつてゐるはずなのに、被害は鎧だけ。どうやらなにかタネがあるみたいだつた。

「ふざけんじやねえよ。俺は神に選ばれたんだよ！お前みてえな雑魚にやられるほど弱くねえんだよ！」

そう言つて相手は両手に二本の槍を構えて突撃してきた。ただし動きが酷く直線的すぎるのとまるで槍を初めて使つたかのような素人丸出しの扱い方だつたため簡単に避けることが出来た。

「クソ！避けてんじやねえよ！他の奴はのろまだつたのに何だよコイツ！こんなのかいるなんて聞いてねえぞ！」

(さつきから凄い五月蠅い奴だな。黙つて戦えないのかな)

黄色の短槍の横薙ぎに合わせて刃翼を振り付ける。流石に折ることは出来なかつたが相手の体制を崩すことは出来たのでその場で急回転しもう一度隙だらけの腹に尻尾

をぶち込んだ。今度はうまく受け身をとつたみたいだが今の衝撃で防具は完全に使い物にならなくなっていた。

「手加減してやつてるのに調子に乗りやがって！さっさと死にやがれ！王の財宝！」ゲートオブバビロン

突然ハンターの後ろの空間が歪んで金色の波紋が広がった。そこからおびただしい数の武器が出てきた。

（えつ？あれって確か友達に借りたアニメで出てなかつた？）

詳しく述べて覚えてないけどアニメに出てきたことは分かる。問題はなんでモンハンの世界で別のアニメの技か使えるのかだ。

（さつきから神様がどうつて言つてたけどなにか関係あるのかな）

ただ少なくとも元々この世界の住人だつたという事はないはずだ。あんな反則技使える人が何人もいたらそれこそモンスターなんて一匹残らず狩られてる。  
（もしかして私と同じ世界の人かな？）

「さつさと喰らつて死ね！」

そのまま大量の武器が私めがけて発射された。バツクステップで躱しても幾つかの武器が追つて来るので森の中に逃げた。ある程度離れてから刃翼を振りかぶり武器を叩き落とす。が、流石は英雄が使つてた武器なだけあって滅茶苦茶硬い。全部叩き落とす頃には刃翼が何本か折れていた。

「出て来いよクソッタレ！雑魚はさつさとやられてればいいんだよ！」

(…………もういいや、手加減するのも飽きたし。殺ろう)

尻尾をまっすぐに伸ばしあのハンターに向かた。ステルス状態になり同時に尻尾にありつたけの電撃を流す。ところでみんなは電磁砲というのを知つてゐるでしょうか？電流を流したレールで金属球をものすごい速さで飛ばす艦載兵器の事を。ただ電気を流すだけと思うなけれ、これは意外と使い勝手が悪い。弾丸を撃つた時に発生する電磁波や衝撃で周囲にいるモンスターが騒ぎ出す。また電流や電圧といつた法則を無視するラージヤンの電撃だと並大抵の金属では耐えられずに空中で消失してしまう。ならばどうするか。今しがた折れてしまつた自分の刃翼を使って撃つまでだ。

(…………そろそろいいかな？)

落ちている刃翼を口に咥え、そこに電撃を一斉に流す。この前から電撃を扱えるように尻尾や刃翼に電撃を流してはいたのでやはりこのくらいなら溶けることもなく耐えていた。そして箇条流し続けると一時的に電気を帯びた状態の刃翼が出来た。それを二本の尻尾の間に挟んでハンターに狙いをつける。前に一度だけ試したときは余波で木が倒れたので直撃しなくとも十分な効果が得られるだろう。

(…………避け)

一気に電撃の量を上げると甲高い音を立てながら刃翼が飛んで行つた。途中の木も

抵抗なく貫通し当然ハンターは避けることも出来ずに棒立ちで喰らつた。とうやら片腕を吹き飛ばしたようだ。右肩から血がドバドバ流れていた。その後に来た余波で吹き飛びハンターは崖下に落ちていった。

ハンターと戦い終わつて思つたのは虚しさだつた。特に思い入れはないし逆に仲間を虐殺してきた人間だが、私が元人間だからか頭の中に殺人という言葉が浮かんだ。

しばらくは踏ん切り付くまで休むかな……

白帝竜観測隊よりギルド本部に連絡報告です。先日の連絡にあつたハン

報告です。先日の連絡にあつたハンターがドボルベルクの討伐中、白帝竜と遭遇。白帝竜が攻撃するも防具の破損のみというタフさを発揮し、更に自分の背後から武器のような物を撃ちだすという謎の技術を使いました。しかし白帝竜が電撃を帶び、直後に見えたオレンジ色の槍のような光でハンターは右腕を根本から失い風圧で崖下に転落する形で終わりました。白帝竜は戦闘後寝床に帰つた模様。ハンターの生死は不明です。

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。ハンターについてはこちらから調査隊を派遣して捜索することに決定しました。また、今回の件でこのハンターの狩猟権利を剥奪する事に決定しました。そして、白帝竜の危険度を改めて協議し白帝竜を古龍種に含める事が決まりました。この事も各地のギルドに情報を流しハンター達に伝わるようにしています。貴重な報告有り難うございます。

# 誘拐

(ううーー！さつむい！早くどこかで暖を取らないと……)

こんにちは、私は今凍土に来ています。あのハンターを撃退後、地味に殺人の意識に悩まされていたのでアイルー達に相談したらまた今までみたいにいろんな場所を回つて気分を切り替えてくればいいと教えてくれた。

(確かに切り替わったけど……別の意味で問題だよ！)

凍土に慣れるために火山で取得した発火器官は重要なものが無いため使うことができなかつた。つまり、火種がない。いくら炎を吐くことができると言つても火種がなくてはすぐに消えてしまう。だが辺り一面氷の世界に閉ざされ、植物は背の低い物や逆に中身がぎっしり詰まつた密度の高い木しかなく燃えにくくなつていた。流石にこれは予想外だつたため途方に暮れていた。このまま帰つてもいいがそれでは情報をくれたアイルー達に申し訳が立たない。

(ああ、なんか眠くなつてきたよ。寒さで死ぬことはないと思うし……ないよね？不安だけど一回休もう……)

(…………なんか揺れてる？誰か来たのかな？)

地面が揺れるような気を感じて目を覚ましたがあたりが暗くて状況が確認できなかつた。分かつた事はどこかに向かっている事と、

(脚枷?)

両足に金属で出来た鉄輪が挟まり鎖がそこに繋がつていて周りの壁に固定されてい る。もしかして捕まつた？

(凍土で寝てた筈だけど……寒さで体が動かなかつたから?)

どちらにしろ面倒な事態になつたことは確かだ。このままどこに連れて行かれるのが 分からないが少なくともまともな待遇で生きていいけるとは思えない。故に逃げる ことにした。まず前脚に付いている鎖を噛むと意外にそこまで硬くなつたため数分 で両前脚の鎖は取れた。次に後ろ脚だがそこまで頭は届かないで尻尾に電撃を流し て焼き切ることにした。そのままやると音がしてバレると思うので出力は小さく一点 に集める形で流すと鎖を切つた。後ろが見えないため感覚で切るしかないから自分の

足を斬るかもしけなかつたがうまく行つたようだ。

(よし、これでとりあえず逃げる準備は整つたから……後ここがどこかだよね。なんか分かんないかな)

壁に耳を近づけると少しだが話し声が聞こえてきた。どうやらギルドや密猟団ではなさそうだった。逆にそれ以外でこんな設備を持つて私を捉えようとするのが分からなかつた。しばらくして揺れが収まつた。どうやら目的地についたようだ。近くに人が寄つてきたのかさつきよりも話し声が聞こえやすくなつた。

「駄目です！何があるか分からぬから危険ですよ！」

「平気じや！それよりも早く蓋を外すのじや！」

「……団長、さつと終わらせて引き渡せば平氣ですよ」

「分かつた。その代わりもう少し後ろに下がつてくれませんか？そこに入られると守ることも出来ません」

そこで会話が途切れ壁が開いた。どうやら檻の中に入つていたようで外側から鉄の板で蓋をしていたらしい。蓋が開くと周りにハンターと少し離れた場所に小さな女の子と執事みたいな人が立つっていた。私の鎖が壊れてるのを見て周りのハンターが騒ぎ出した。

「なぜ鎖が壊れている！あれはイビルジョーてすら引き千切ることも出来ない硬度の鎖

だぞ！」

「騒ぐな！まだあいつは檻の中にいるんだ！ガンナーは睡眠弾を撃ち込め！」  
ハンター達の中でボウガンを持つている人達が一斉に構えたのでこちらも動くこと  
にした。尻尾に先程の様に電撃を溜め、尻尾を回すように振り檻の側面を切り飛ばし  
た。辺りにガラガラとうるさい音が響いた。

「檻を切つただと?!」

「どうするんですか団長！」

ハンター達が混乱してると奥にいた女の子が近寄ってきた。

「お嬢様！危険です、こちらにお戻りください！」

「爺はいつもうるさいのじや！妾の好きにさせよ！」

そのまま目の前まで来ると鼻に触つたり目を覗きこんできたりした。正直何がした  
いのか分からぬ。頭に手をかけて体を持ち上げようとしているので上に乗ろうとし  
てるのは分かるが。仕方ないので尻尾の電撃を消し、女の子の両脇に尻尾を入れてゆつ  
くり持ち上げ体の上に載せた。

「お嬢様！危ないです、早くお降りください！」

「何を言うのじや！妾を見ても襲つて来なかつた！危険はないはずじや。それに妾には  
分かるのじや！こいつは人を襲うようなやつではない！」

そのまま女の子と爺と呼ばれる人が口論を始めたので周りをハンターに囲まれているため動けない私は寝ることにした。この調子じや女の子は降りなさそうだし、女の子が乗つてゐるのに攻撃をすることはないだろう。服装や言葉の端々からこの子が上流階級の出身なのは分かるのでそんな子に怪我をさせるようなことはしないだろう。

# 逃走

「ふむ、これも嫌いなのか？」

(いや、単純に食欲ないだけなんだけどね。伝わらないと思うけど……)

現在、どこかの宮殿のようなお城の中庭にてハンター達に囲まれながら女の子に色々話しかけられていた。周りの会話から察するにこの子はここ別の所有者の娘らしく相当立場の高い子らしい。その割には自由奔放すぎるが。女の子が次々とこんがり肉だつたり調理した魚だつたりを持つてくるがあまりお腹は空いてないため遠慮しておいた。それに中に何が入ってるかわからないし罠ではないとは限らないから食べ物には手を付けてない。

「お主、食べなければ育たないぞ！」

「お嬢様、もしや今は空腹ではないのでは？」

「おお、執事さんナイスフォロー。見直したよ。

「いやじや！妻はこの者が食べているところを見たいのじや！」

「ワガママ娘エ……執事さんのフォローが。

「でしたら与えるものを変えてみては？噂によると蜂蜜が好物と聞いたことがあります

す。これをどうぞ」

「準備が良いぞ爺。ほれ、これならどうじや?」

(いや、蜂蜜はいいんだけど別にそこまで……まあいいか)

この後、ここから出て行く時に何も食べていなかつたせいでスタッミナ切れなんて起きたら笑えない為少しだけ食べることにした。といつても渓流の斎みみたいに蜂の巣ではなく匙で口の中に一杯ずつ垂らすので全然食べた気がしない。小さい飴を舐めてる気分だつた。私が食べたことに満足したのか私の上に乗ると眠りだした。下手に動くと落としてしまうので動けなかつた。私をここから動かさない為の作戦なんだしたら的確すぎて涙が出てくる。

(暇だなあ……いつもと対して変わらないけど。それにしても凍土どうしよつかな  
……行くのやめようかな)

このまま行つてもまた凍死寸前のところを囚えられるだけだ。何か手段を考えなくては。これ以上発熱器官を望むのは無理そうなので別の方向性で適応しないと。（電撃なんて使つたら体中黒焦げになりそудし……溶岩？）

一瞬溶岩をガブガブ飲んで自分を想像したけど流石にありえない。そんなの飲んだら進化する前に死んでしまう。

だとしたらまずはこの子を退かして、周りのハンターから逃げないと。ハンター達の武器を見るにそこまで上位の武器ではなさそうだから逃げに徹すれば苦労はないだろう。という事は問題は自分の上で寝こけているこの女の子だけだ。女の子の脇下と膝下に尻尾を入れて、いわゆるお姫様抱っこでゆっくり下ろした。地べたは不味いとい芝生の生えてるところに下ろしたから勘弁して欲しい。そのままハンター達の静止を無視して逃げ出した。途中ステルス状態になり追っ手はすぐに撒くことが出来た。（とりあえず火山に向かうかな、飛ぶとばれるから歩いて行こう）

「…………はどこじゃ？…………あつ！あの者逃げおつたな！逃さぬぞ――待て――！」

「お嬢様は何処にいらっしゃるのだ？」

## 同行者

「ようやく見つけたのじゃ！ 妻もついているの！」

(あの……何でここに居るの？)

ハンターを振り切り追つ手が撒けたことを確認するためステルスを解除したのが運の尽きだった。いつの間にかさつきの女の子が後ろにいて尻尾から私の体の上によじ登つてしまつた。見た目によらず随分アグレッシブ過ぎて驚いた。

(と言うかこれ、私が誘拐したみたいになるよね……私が誘拐されたほうなのに)

もしかしたらハンター達に既に依頼が回つてるかもしれない。かと言つてここに置き去りにしては野生のモンスターに襲われるだけ。なら多少危険でも連れて行つたほうが安全かな？ これから行くの火山だけ。

(私これから空飛ぶんだけど)

何も対策せずに飛んだら確実にこの子は落ちるだろう。悩んだ結果尻尾を女の子の体に巻きつけて衝撃で飛ばないようにした。こうでもしないと無理だろう。

(ちゃんと捕まつてよ！)

女の子は飛ばされることなく尻尾に捕まっていた。それどころか途中で「景色が見たいからもつとゆっくり飛べ」や「あそここの湖が見たいから降りろ」など傍若無人っぷりを見せた。モンスターにここまで言える子もそうそういないがいちいち要望に答えてしまった私も私だろう。おかげで火山に到着した頃にはすでに日が暮れていた。

「今日はここで寝るのか？妻はベッドのある場所で寝たいんじゃ……」

（そんなのハンターの拠点にしかないでしょ。そこまで行つたら私がやられるよ）

本格的に駄々をこねないうちに尻尾で持ち上げると腹元に押し付けて尻尾で包んでおいた。私もある程度は体毛があるから暖かいはず。これで文句あるなら置いていこう。

「おお！……ほおー！」

お気に召したらしい。ただ尻尾の毛を引き抜こうとするのはやめて欲しい。すつごく痛い、尻尾が千切れるほどじゃないけど地味にくる痛みがある。

（…………やっと寝た）

しばらく位置を調整したり毛を引っ張つたりしていただが飽きたのか、丁度いい位置を見つけたのかようやく寝てくれた。安心したので私も眠りだした。

――――――――――

(その子はどうしたんだにや?)

(うーん……成り行きで着いて来ちゃつたとしか……)

現在、朝食のために鉱石でも食べようとしてピツケルで採掘をしているアイルーを見つけて集落に案内してもらつた。ちなみにどこでピツケルを手に入れたか聞くとハンター達が手持ちがいっぱい捨てて行つた物らしい。

「可愛いのじや!一匹連れて帰るぞ!」

暴れだしそうだったので尻尾で掴み上げて背中に乗せておいた。

(それで、ルナさんはどうしてここに来たんだにや?)

ルナさんは私のことらしい。ルミナスを切つてルナ。それならルミじやないと思つたがルナの方がいいらしい。まあ元々月光でステルス状態になるので月を表すLunaが合つてるしいいか。

(前にここに凍土で寒さに負けないために何かないかなつて思つたんだよ。その時は草

を食べてたら発火器官が出来たみたいなんだけど、凍土じや燃やすものがなくて意味が無かつたんだよ)

(それで別の物を探しに?)

(そうそう、何かそういうつたものつて知つてる?)

(うーん……あつ、一ついい物があるにや)

(本当?)

(ただここじやにやくて他のみんなの場所にあるにや。だから暫くここにいるといいにや。僕達で集めてくるにや)

(私も手伝おうか?)

(それは有難いにや、でもそれだと……)

（そう言つて私の上ではしやいでる女の子を見た。

(ああ……私しか止められないしね)

(そうだにや、だからここで待つててくれにや。すぐに集めてくるにや)

(有難うね)

「何を話しているのじや! 妻にも分かるように話すのじや!」

# 女帝

(ルナさん、これが言つてた奴にや!)

(これが……?)

あれから三日程立つた日、アイルー達がたくさんやつて來た。私の頼んだ物が見つかつたらしい。しかしここ三日間、私にとつては凄く氣の休まらない日々だつた。原因はあの女の子だ。少し目を離すと集落から出てエリア内を歩き回る。その度に探しまたり、言うことを聞いたり、彼女を襲おうとするモンスターを何とか説得したり。気づけば誰も彼女を見ても襲わないようになつてた。

(これつてどこで手に入れたの?)

目の前に大体饅頭ほどの大きさの色鮮やかなビー玉みたいなのがいくつか置いてあつた。

(大型モンスターの死体があつた場所に落ちてたりするにや。僕達じや使い道がないし、それににやにか変な感じがするから貰つてくれるところちも助かるにや)

(変な感じ?)

(大型モンスターの気配だつたり、よくわからない力みたいにやのを感じるにや)

私自身が大型モンスターだからなのか特に変な感じはしなかつた。

(それじゃあ……貰うよ? )

(どうぞにや)

鉱石でも食べる感覚で齧つたがものすごく硬い。歯が欠けるほどではないけど硬いせんべいを食べてる感じだつた。食べ終わつたが何か体の中で変化したような感じはない。そんないきなり劇的に進化したら驚くけどね。

(これで、発熱器官が増えるかな?)

(えつ?)

(…………えつ?違うの?)

(一応それっぽいものを持つて来ただけにや。発熱器官がつくかは運次第にや)

(…………凍土行くの諦めようかな)

(だ、大丈夫にや!きっと発熱器官も出来るにや!)

(だといいけど……)



(ルナさん、にやにか変化はあったかにや?)

(何もないよ……なんかウズウズしてる感覚はあるけど。前みたいに火を吹いたり電撃が出たり分かりやすい変化はないね)

(ごめんにやさいにや……僕達が変な物を食べさせちゃつたからにや……)

(平気だよ! 絶対そのうち何があるよ)

だが、予想に反して特に変わったことはなく数日が過ぎた。謝ることはないとアイ

ルー達を宥めて自分達の集落に帰した後、火山で何かないかと探していた。

(他に何かないかな……この辺りは探し尽くした気がするからもうないのかな……)

すると空が曇つた。いきなりだつたので驚いて空を見上げると原因が分かつた。何か大きな影が自分の上にいたのだ。その影は自分を追い越すとゆつくり旋回しながらこちらに着地した。

(おや、貴方でしたか)

(カドラさん?)

なんでカドラさんがこんなところに? 住んでる場所はもう少し向こうだつた気がするけど。

(いや、ここ数日前に凄く大きな加護の力を感じたのですが……まさか貴方だつたとは)

(大きな加護ですか?)

(ええ、ここ最近なにか変わったことはないですか?)

(特に……あつ、でもアイルー達に小さな光つてる石みたいなの物を幾つか貰つたのでそれを食べました)

(小さな光る石…………もしかして宝玉ですか?!)

(えっ!…………えと、分からないです。アイルー達がこれを食べれば発熱器官もつくかもしれないって。私がそういう物がないか頼んだんです)

(これは面倒なことになりそうですね…………とりあえず移動しましょう。ここでハンターに遭遇すると不味いですから)

そういつてカドラーさんは飛んで行つてしまつた。慌てて着いて行くと前にカドラさんとあつた場所についた。

(ここなら大丈夫でしょう。さて、まず貴方が食べてしまつたものですがあれは宝玉と言われているものです)

(宝玉…………ですか?)

(ええ、宝玉とは言わば力の源。私達がハンター達に恐れられている力はこの宝玉の力なんです。もちろん私も持つてますよ)  
(私も持つてたりするんですか?)

(ナルガクルガ希少種のステルスは周囲の環境と自分の体を使つた擬態に近いものなので宝玉の力ではない…………はずです)

(はず?)

(なんと言ふか…………無いはずなんですけど貴方からは色々な宝玉の力、言い換れば加護が感じられるんです。それに貴方本来の加護も何だか前にあつた時よりもだいぶ変容しているみたいですね)

(えっと…………つまり力が強くなつたつてことですか?)

(力が強くなつたというよりは扱える力が増えた、と言つたほうが正しいですね。さつき言つた通り加護の力が増えたのですから。僕は水を除く四属性の加護が在りますが、貴方はそれ以上にたくさん加護が感じられるんです。おそらく僕以上にあると)

(そ、そうですか…………あの、私の加護はどんな感じなんですか?)

(そういえば聞いてませんでしたが、貴方自身の加護は何なんですか?)

(ミズハさんは崇拜だろうって言つてました)

(崇拜ですか…………そうするとだいぶ変わりましたしおそらくより強制力が増した感じになると思います)

(…………本当ですか?)

(ええ、さしづめ狂信や盲信と言つたところでしようか?まだ力に馴染んでいないので

そこまでの効力は発揮しませんが、最終的にはおそらく……神と崇められる可能性もないとは言い切れません。それほど加護の力は良くも悪くも強力です）

（……………そうですか）

（今日は休んでください。このまま悩んでもいいことはありません。もし何かあつたら僕も力になりますよ。乗りかかった船ですし）

（有り難うございます……）

（非常に不味い方向に傾きそうですね。彼女が力の方向性だけでも決めることが出来ればいいのですが……それに、おそらくあの宝玉も食べたのでしょう。まつたく、普通宝玉なんていくつも食べたら自壊するか精神が耐え切れないのに……あの者はどう

なつて  
るん  
でしょ  
うね

# 混沌

(はあ……いい加減意識切り替えないと不味いよなあ)

一旦凍土に行くのは中止して渓流に戻つてきて数日。帰つてきた瞬間にジャギイ達が魚や蜂の巣を持つてきただので早速加護の力が強くなつてることを確認したがその後からが本番だつた。朝起きれば食料を持つてくる。空を飛んで軽く散歩に行くだけで大量のモンスターが着いて来る。終いにはハンターが渓流に入つてただけで無差別にほぼ渓流内のすべてのモンスターが襲い掛かる。今までとあまり変わらないと思うが、今は動く数が違う。前までなら多くて三頭とか一緒に散歩感覚だったのに今じゃほとんど付いて来るから護衛みたいな感じになつてている。向こうからしたら案外そのかもしれないけど。

(とりあえず、何とかしてこの状況を変えないと。もしここにいるだけで他のモンスターに影響があるならもつと別の場所に行こう)

それこそモンスターが一匹も居ないような辺境の地に。  
 (私の加護は常時発動してるから抑えることは出来ないと。加減とかは出来るのかな?  
 そもそも私自身、他の加護の力は意識してないんだよね)

頭の中で加護の力を意識してみるが全く分からぬ。どうやらただ炎を出したり、電撃を放つたりではないようだ。

(それにつちも問題だよね……)

傍らではさつきから女の子がうなされていた。丁度私が宝玉を食べた辺りからなで私の加護の力が働いてると思う。この子は私に付いてきたけだから何も関係ない、それなのに私の事情に巻き込んでしまった。せめてアイルー達を帰す時に一緒に前の別荘に帰せばよかつたよ。ここで言つても仕方ないから早く制御できなくとも力を知覚して強弱くらいはいじれるようになりたい。

――――――――――

あれから二日、未だによく自分の加護を理解していないけど、一つだけ分かったことがあつた。私が近づくと女の子が呻き出し、私が何かをしに少し離れると呻き声が収まる。どうやら私の一定範囲にいることが原因なのかもしれない。これが分かつただけでもずいぶんな収穫だった。

(ごめんね、私が自分の危険性をよく理解しておかなかつたから……今回の事で学んだよ。私は私を理解してくる。もしかしたらまた逢えるかもね。ばいばい)

女の子をハンター達が本来使う拠点のベッドにゆっくり寝かし、ステルス状態で全力量その場から離れた。遠くの方でモンスターの声が聞こえるけど今は全て無視する。  
(できるだけ遠くに行こう。モンスターがいない、ハンターも来ない場所に……)  
目指すのは加護の制御だ。それくらい自分でやつてやる。

↓↓↓↓↓↓↓↓

### 白帝竜観測隊よりギルド本部に連絡

渓流に白帝竜が再び帰つてきた後、他のモンスター達の行動が激変しました。常に白帝竜の周囲に陣取り、食料も奪い合つて白帝竜を持つて行こうとしています。白帝竜の力が増えたか、もしくはうまく制御できていないか、もしかすると白帝竜自身の力が弱まり周りのモンスター達が護衛しているのかもしれません。また、渓流のベースキャンプで王族から極秘に依頼されていた第三王女に似た格好の少女を見つけました。急ぎ保護をお願いします。白帝竜は現在の居場所は分かつていません。恐らくですがステルス状態で移動したらしく見つけるのには時間がかかると思います。

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

了解しました。ベースキャンプで発見された少女は依頼の第三王女と言う事が判明しました。発見したハンターには後日依頼料をこちらから渡す形になりました。白帝竜が消えた件ですが討伐依頼を取り消し、代わりに広い地域で再び生態調査の依頼を回すことが決定しました。そのためそちらは一時こちらに帰還してください。今日まで観測ご苦労様でした。

# 超越

(.....)

とある地域に最近ある龍の噂が広がり始めた。その龍は全身を覆う白銀の翼膜を持ち、その腕についた白刃であらゆる物を切り裂くという。またこの龍が目撃される日は霧が深く立ちこめていることからナルガクルガ希少種ではないかと言う意見もある。

(.....)

しかし、姿を見たハンター達は次々にこれを否定した。曰く、あれはナルガクルガなんかじゃないと。何処にいるか分からないままで一方的な攻撃で帰ることとなつた。分かつたのは撤退する直前に見えた肩から生える二本の豪腕だけだつた。他にも豪腕には巨大な白刃が付いていた。全長は普通のナルガクルガよりもよっぽど小さいのにパワーが桁違い。など帰つてくるハンターによつてまちまちな意見だつた。そしてこのモンスターは決してハンターを必要以上に攻撃することがないことで知られた。こちらが戦闘継続が難しくなつた時点でどこかに消えてしまうため、詳しい事は何一つ分からぬ謎の龍。ハンター達の間では自分の腕を確かめる為の修行になるという人もいる

ます。是非、この謎の龍の依頼を一度受けてみては？

(なにこの記事)

(何でも、週間ハンター達の生き様つて言う雑誌で取り上げられてるらしいにや)  
(だから最近ハンターが多く来るのか……)

あの日から私は誰にも見つからないような場所を探した。でも結局見つけることは出来なかつたためこれが最後だと思い、アイルー達を頼つた。するとここから西の方に向かつた場所に環境が厳しすぎてモンスターがいないという場所があることを聞いた。早速そこに向かつて飛ぶこと三日間、ついにその場所に辿り着くことができた。一部を除き辺りを断崖絶壁に囲まれた絶海の孤島だつた。食料は島に自生している小さな木の実と茸のみ。それですら私が一週間も食べ続けばなくなつてしまふ。だからそれ以内に食料源を確保するのも重要だつた。幸い辺り一面が海なので海産物は豊富に取れる。私の加護に向き合いながら四年間過ごした。その結果

(けど、前来た時とは大違ひだにや。あの時はいきなり体が勝手に動いてその後の記憶

も軽く曖昧になつてたにや）

（あの時のことはゴメンつて言つてるでしょ）

狂信・盲信の加護をある程度まで操作することが出来るようになつた。やつたことは海に半分浸かり、加護で周囲の魚を操りまず加護の力を知つた。次に加護の力のレベルを下げられるように試行錯誤した。これに殆どの時間がかかった。けどレベルが下げられるようになつてからは特に苦労もなく行えた。やはり自分の中に感覚として残つたのが大きな要因だつたようだ。今ではこうして気兼ねなくアイルー達と話していくられるが前までは来た途端機械のように動く事しかなかつたからあの時に比べたら全然成長したと思う。因みにアイルー達は波の穏やかな日を選んで船で一気にここに来るらしい。これには流石に驚いた。

（それで、力の方はどうなつたにや？）

（うん、自分の加護含めて全て制御済みだよ。まあ一番の自分の加護がまだ若干不慣れだけど）

（でも初めよりは十分に使いこなせてると思うにや）

（そうだね…………そろそろ戻るかな）

（いや、いきなり渓流に行つてもみんなを驚かせるだけだし。それなら前に中斷した凍

土に行つてみようかなつて)

(ルナさんの決定に従うにや)

（そんな訳で今日まで色々有り難うね。自分でやろうとしたのに結局最後まで手を貸してもらつちやつたし……）

(気にする事はにやいにや。  
困つたときはお互ひ様だにや)  
(……有り難う)

ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

ハンターの報告により凍土にて全く新しいモンスターが確認されました。対象の外見はナルガクルガに近いですが決定的に違う点として尻尾が二本、炎弾を飛ばす、電撃や嵐のような暴風を全身に纏う、対象の周囲が突然爆発しだす。そしてステルス状態になると周囲のモンスターを率いるように行動する事からこのモンスターを四年前に姿を消した白帝竜と断定しました。またハンターの報告にシャガルマガラのように肩から二本の豪腕が生えるとの噂がありました。こちらも十分留意した上で観測を行つてください。

# 極限

(何か、渓流での大狩猟を彷彿とさせるものがあるね……)

凍土の氷塊の上から覗くと防寒の為の防具を身につけたハンター達が荷車に乗り、凍土の拠点に向かつっていた。渓流の時と同じくまた大狩猟でも始めるのかと思つたが、よく見ると爆弾や罠と言つた物はなく、代わりに食料や回復薬などの消耗品が多く積まれていた。更によく見るとハンター達の何人かが首から双眼鏡らしきものをぶら下げていた。

(あれで何かを見る……もしかして討伐じやなくて観察?)

ここ四年間姿を見せなかつた私の生態を調べるために来たのかもしれない。どちらにしてもやる事は変わらずハンター達を追い返すだけだ。

(そうと決まれば他の子たちには手出し無用つて言つておかないと)

まだうまく扱えていないがある程度の指示を他のモンスターに伝えることが出来るようになつた。といつても物凄く曖昧な『ここから逃げろ』や『一緒に戦え』などの何処ぞのゲームのさくせんコマンドみたいな物しか伝わらないが。これも含めてまだ狂信・盲信の加護は制御中だ。

(この分だと本格的に始まるのは昼頃からかな……それまでは皆の避難と場所の選択かな)

他のモンスターを巻き込まないよう逃がすのと、私の技の範囲圏内に巻き込まないように私自身も場所を考えないと。

(始まつたみたいだね……)

向こうの方から足音がたくさん聞こえてきた。もうすぐでこちらに辿り着くはずだ。  
(とにかく、四年間頑張ったことだしどれくらい通用するか試してみるかな)

すると、エリア内にハンター達が入ってきた。選んだ場所は開けた周りを氷の壁に囲まれたコロッセオのような場所だ。出入口は基本的にハンター達が来た場所か空を飛ぶのみ。なので奥を陣取つておけばハンター達を出入口に弾き飛ばせる。間違つても壁に叩きつけてその後ミンチなんてことにはならないはずだ。

(それに加護に関しては相当練習したし、事故はないでしょ。一応気を付けとくけど)  
「見つけたぞ！ 周りを囲め！」

それぞれのパーティが互いに邪魔にならないように適度に連携しつつこちらに来た。

盾持ちが壁になりその隙にガンナーが援護射撃をしてきた。  
 （とりあえず攻撃しますか）

体中に電撃を纏い斬りつける。流石にこの程度じゃ削れないし、手の内がバレバレなんだろう。逆にギリギリで躱し反撃してくるくらいだ。ならばと思い刃翼に電撃を纏つて刃の長さを伸ばす。同時に斬れ味も上がるがそのままだと間違つて攻撃が当たつた時大変なので、刃を潰して丸まる感じに纏める。

「新しい攻撃だ！ 注意しろ！」

一人のハンターが叫びまわりに注意を促す。でもこれは普通に躱すんじや意味がないけどね。

「?! この攻撃、追つてくるぞ！」

（流石にバレるよね）

実はハンター達が着ている防具の金属に反応して刃が微妙に曲がるのだ。さつきのようにはギリギリで躱していると方向修正して当てに行くのだ。けど、あくまで少しだけで見極めれば攻撃の隙は減るが当たる事はなくなる。

（どんどんやらないとこっちが殺られそうだね）

向こうは多分攻撃パターンなどの観測だと思うけど狩れるならそのまま狩ると思う。そうならない為に次の攻撃のための準備をする。いつもは霧を出すが今回は可燃性の

高い鱗粉を周囲にばら撒く。もちろん撒いてることをバレン様に動きながら。そしてエリア内にある程度充満したところで纏っている電撃の出力を一気に引き上げる。すると

(…………どうかな?)

私の周りを避けるようにエリア内で爆発が起きた。後衛のガンナーをも巻き込んで爆発させた。あまり被害はなさそうだ。ガンナーが何人か撤退したがおそらく途中に設けた簡易拠点に戻つただけだろう。

(それにはいぶ攻撃も当たつてきたし……そろそろ頃合いかな?)

体内にある器官を動かし何時でも出来るように待つ。同時に肩の双腕に意識を持つて行くと新しい感覚が増えた。いつになつてもこの腕が増える感覚にはなれないが行動するのに違和感を感じない程度に練習したので問題はないだろう。そこで体内の器官が準備出来たので一気に放出した。

「なんだ?! こいつ硬くなつたぞ!」

体から黒いオーラのようなものが見えるので成功だ。使ったのはゴア・マガラが使つてている狂竜ウイルスだ。それを体内で爆発的に増や体中に流す。このままだとウイルスに侵されるだけだがここで狂信・盲信の加護を使いウイルスを支配すると肉質の超硬化とスタミナの急速回復、それに加護の力を十分に引き出せる。

「ガンナーの弾も弾かれてるぞ！ どういう事だよ！」

「こつちも全然刃が通らねえ！弱点を探し出せ！」  
(残念だけど……全身硬化させてるから攻撃は効かないよ)

攻撃が効かないとためごり押しで行く事も出来るけど四本に増えた腕を使つて複数人に狙いを付けて攻撃していく。腕で薙ぎ払いハンターを的確に攻撃していく。途中途中に腕や脚を抑えてることから骨折したようだけど今更だし、それくらい覚悟してきてるはずだ。更にプレスで後衛のガンナーを狙う。いきなり狙われたため避け損なつて体を焼かれる者もいた。火傷による熱で悲鳴をあげるハンターに驚き前衛が動きを止めを焼かれる者もいた。火傷による熱で悲鳴をあげるハンターに驚き前衛が動きを止める。その隙をついて刃翼の電圧を上げて叩き込む。今度は面制圧の意味も込めてあえて纏めず放電する形で当てた。電流が流れ麻痺状態になつたハンターを出入り口めがけて殴り飛ばす。徐々に離脱するハンターが増え、三十分程すると全員が撤退していく。

(やつと終わつた…………疲れたしさつさと寝よ)



ギルド本部より白帝龍観測隊に連絡

先日行われた白帝龍の調査クエストですが依頼を受けたハンターの殆どが重症、または軽症を負い現在治療中です。ハンター達の報告によると攻撃パターンが大きく変化し、以前よりも攻撃性が上がったとの事。また戦闘中に他のモンスターが乱入して来なかつた等、狩猟環境にも変化があつたようです。正式依頼を更新すると共にそちらも観測結果の報告お願いします。

クエスト名『極寒の地に住む隠者』

依頼者：ギルド本部

クエスト内容：四年間姿を消していた白帝龍がついに凍土にて発見されました。先遣隊のハンター達を全員リタイアに追い込むほどの実力を秘めています。姿を消していく間に更なる進化を遂げ、攻撃パターンも大きく変化したこの白帝龍を討伐する猛者をここに募集します。

契約金：30000z

報奨金：70000z

## 嵐

あれからしばらく経つたがそれ以降ハンターはめつきり数が少なくなり日に一回見  
ればいい方くらいの頻度になつていた。個人的には静かで大助かりだが。

（向こうじやひたすら魚と睨めっこしながら、あるかどうかもわからない力の制御だな  
んて悟りが開けることしてたからなあ。平和でいいわ）

だがこれはこれで暇なものだ。怪我は特にないから好きな場所に行けるが今まで一  
つの場所にいつづけたから今更他の場所に行く気にもなれなかつた。

（何かないかなあ。静かで尚且つ少しの刺激に溢れたプチイベントは……）

寝て過ごしてもいいけど久しぶりにあそこから出て来たんだから何かしたい。でも  
思いつきり動きたくはない。

（そろいえば蜂蜜食べたいなあ……）

ふと蜂蜜のことを思い出し起き上がつた。あの孤島には蜂蜜などあるわけもなく四  
年間も口にしていなかつた。久しぶりに食べてみてもいいだろう。だが凍土中を蜂の  
巣は見当たらなかつた。誰かが食べたのか、元からないのかは分からぬけど。  
(運が悪いなあ。仕方ないし、溪流にでも行きますか)

(ここも久しぶりだな……結構変わっちゃったね)

前に住処にしていた高台は他のモンスターの卵があつた。別のモンスターが使つているのだろう。ステルス状態でエリア内をしばらく歩き回つていると蜂の巣を見つけた。

(蜂蜜食べるのも久しぶりだし、しばらくしたら砂漠とか沼地にもまた行つてみるのもいいかもしないなあ)

皆がどうなつたかも気になるし、それもいいかもしない。しばらく蜂蜜を食べ歩きしながら歩くと崩れた人工物を見つけた。多分元々はもくせいの家だつたのだろうが木の破片がバラバラに吹き飛んでいた。

(なんかモンスターの攻撃じやなさそうだね。嵐でもあつたのかな?)

気にはなつたけど特に重要じやなさそうだし蜂蜜も十分食べたので戻ることにした。空を飛んで戻っている最中に遠くに凄い大きな雲を見つけた。進路は分からぬけど

出来ればこっちに来ないで欲しい。ただでさえ寒いのに嵐なんて凍え死ぬかもしれない。いざとなつたら極限状態になつて体温上昇させる力業もあるけど。今から少しづつ薪でも溜めておこう。極限を使わずに暖まるなら炎に当たつてるのが一番だ。無駄な体力消費を防ぐためにもそうしよう。

~~~~~

#### ギルド本部より白帝竜観測隊に連絡

ユクモの村に伝わる災害をもたらすアマツ・マガツチが雲と共に移動したという情報が上がつてきました。周囲に嵐を起こしている大きな雲を見つけたら注意してください。また行方不明になつていたゴア・マガラですが渓流にほど近い場所に住むモンスターが狂竜化している事から渓流付近にいると考えられます。場合によつてはアマツ・マガツチ、ゴア・マガラが一堂に会する可能性もあります。白帝龍以外の動向にも注意してください。

# 黒嵐

(なんでこんな状況に……)

目の前では嵐を纏つたアマツマガツチとゴア・マガラが戦っていた。アマツマガツチが水弾を撃ち込むとゴア・マガラが両腕でガードし、カウンターでアマツマガツチの頭に殴りかかる。それを空中に飛んで回避するとまたお互に睨み合つた。何故こうなつたのかは少し前に遡る。



(やつぱり蜂蜜は美味しいね。ずっと食べてたいよ……いや、四六時中じやなくてだね……聞こえてないか)

今日も今日とて渓流に来て蜂蜜を食べていた。隣にはアオアシラが座つて一緒に食べているがこちらの言葉は通じていない。どうやらこのアオアシラは加護を持つてな

いらっしゃい。まあ大体のモンスターは持つてないから確率はそう高くない。むしろこんな簡単に喋れるモンスターに遭遇する方が怖い。

(平和だな……のどかだし、やっぱりこっちに住もうかな?)

だか前にいた高台は他のモンスターの巣になつており他の候補も先客がいる。その辺で寝ていてとハンターに即見つかり面倒な戦いに巻き込まれる。そう考えるとここに住むのも難しいのかもしれない。

(いい場所があればそこに住むんだけど、そう簡単には見つからないよね。そんな場所があつたら他のモンスターが見つけるだろうし)

すると突然アオアシラが慌てて逃げ出してしまつた。何かしてしまつたのかと思い、辺りを見渡すと足元に薄く黒い霧のようなものが漂つていた。

(これつて……アイルーが言つてたゴア・マガラつてやつ?)

黒い霧は渓流の奥から流れ出しているようだつた。そこまで行けばこの霧を出しているゴア・マガラの正体も掴めるかもしれないと思ひ渓流の奥へと進んだ。岩場を駆け上り、倒木を越えていくと段々と霧が濃くなりそれと同時に風も強くなつてきた。

(幾ら何でもこの風はおかしいでしょ。向こうはほど無風状態だから霧も漂つてたんだし、この風つて人為的に起こされてるもの?)

この世界に巨大扇風機みたいな発明品なんてないだろうし、そうなるとあと考えられ

るのは加護を持つたモンスターになる。

(でも自然を操る加護を持つたモンスターなんて古龍ぐらいしかいなさそудаし、逆に飛龍種とかで周囲の地形に影響与えるやついるのかな)

進み続けてついに霧と風の発生場所近くまで来れた。どうやらこの巨大な高台の上にいるらしい。どうにか吹き飛ばされないよう上に飛びと高台の上に着地する。

(……風強いなあ)

そこにいたのは全身が黒い鱗に覆われた四本腕に黒い霧を出している龍と宙を舞い、水弾や水流のレーザーを撃ち込み時折尻尾の一撃を与えるようとしている白い龍だった。

(貴様は招かれざる客だ！即刻ここから出て行け！)

(うるせえな！誰がどこにいようが関係ねえだろ！)

二人ともお互に主張し続けるため攻撃はますます激化していく。こちらに被害が出そうになるため、そろそろ声をかけることにした。

(あのー！聞こえますか！)

(ああ?!今忙しいんだよ！邪魔すんな！)

(なんじや！貴様もここに侵入した者か！)

(いや、このまま続けたらこの辺一帯穴だらけになりますよ！)

既にレーザーが当たつたりで岩が砕けている箇所もある。私の発言でようやく気付

いたのか白い龍の方が攻撃をやめた。

(なんだあ？俺に負けるのが怖くてびびつちまつたか?!)

(貴様あ！)

(だから！それ以上挑発しないでください！)

突撃しようとしているゴア・マガラを腕を四本全て使い抑え込む。体格差もあって押さえきれなさそうだったが、自分の肩から生えている腕を見て止まつた。

(なんだ？お前も俺と同じ種族なのか？)

(いえ、自分は違いますよ？ただちよつと……いろいろあつて)

軽く島での思い出を思い出し震えた。

(そ、そうか。それ以上は聞かねえよ)

(私はルミナスって言います。二人の名前は？)

(俺はケイオスだ)

(我が名は天藍だ)

(じゃあケイオス、天藍はなぜここで戦闘を？)

(その者が我が土地に勝手に侵入したあまりか、この地の者によからぬ影響を与えているからだ！)

(適当なこと抜かしてんじやねえよ！そもそもお前らが弱えからウイルスに感染してん

だろ！）

（なんだと貴様！・）

（ああ?! やるのか！・）

そのまま二人は先程のようにまた戦い始めてしまつた。

（……もう、放つておこうかな?・）

止めるのも面倒になつてきたがこのままでは更に渓流の先にまで被害が出てくるため泣く泣く二人を止めに入つた。

# 指南

(ところで、貴様はなぜここに来たのだ?)

二人の喧嘩を止めた後、天藍に質問された。

(何故つて言われても……元々丁度いい住処を探してたんだけど、さつき黒い霧を見つけてそれを辿つてきたらここに着いたんだよ)

(その辺に住めばいいじゃねえか)

(そう簡単に決まる話じやあるまい。その辺と言つた場所にどれだけのハンターが来る?それを考えてからものを言うのだな)

(喧嘩売つてんのかあ?!)

(貴様が馬鹿を晒しただけだ!)

(止めなつて! なんで二人ともそんな喧嘩してるの! ちょっと二人とも離れなよ)

(ふん……とにかく、その辺が駄目なら誰かんとここに邪魔すりやいいんじやねえか?)

(誰かつて言つても……)

四年間も絶海の孤島に引き籠もつていたのだ。知り合いに会えるかどうか分からぬ。前々から塔にも行つていたがアンセスを見ることもなかつた。単にタイミング

の問題ということも考えられるが。

(なんだ? お前ボツチなのか?)

(べべべつにボツチなんかじやないし! ちゃんと友達だつているもん! )

(へえー)

(信じてなさそうだな)

(そりやそうだ。こんなひよろつちい奴に友達が出来んのか? ちょっと言つてみろよ)  
(えつと……アンセスと、カドラーと……あとミズハさんとかアイルー達)

しまつた。数えてみてわかつたけど私思つたより友達少なすぎだよ……。ジンオウ  
ガとかイビルジョーは話した事ないし分かんないんだよね。なんとなく言いたい事は  
わかるけどそれだけだし。女の子は成り行きで一緒だつただけだから友達なのかも微  
妙だ。

(なんだよ、全然いねえじやねえか! )

(うつ……言い返せない」

(だが、逆にそのもの達とどの様に知り合つたのだ? 古龍が大半の様だが……)

(私が元々いた場所にアンセスが偶に月を見に来てたんだよ。で、飛んでるときに翼が  
燃えて落ちたところにミズハさんがいて、その後火山でカドラさんに会つたんだよ)  
(思つたよりも波乱万丈な生き方をしているな)

(まず翼が燃えたつてなんだよ)

(色々あつたんだよ……)

まだ加護を扱いきれてなかつた時の話だけど不思議と忘れずに覚えている。まあ尻尾切られたり、変なハンターと戦つたり、大狩猟したり、嫌な事ばつかだつたから忘れてないだけかも。

(とりあえず、行く宛がないなら雪山を進めるぞ)

(何で?)

(あそこは環境が厳しくモンスターの数も少ない。それに豎穴などの洞窟もある。なかなかいい良い場所だ。こいつの様なデカイ団体だと入らないが貴様は小さい方だ。平気だろう)

(そつか、ありがとね天藍)

(テメエ俺の体貶してんのか?!お前みてえに変な色してないだけマシだ!)

(黙れ! 単色で黒など自然に混ざる事も出来ないのか?!)

(うるせえな、俺は強いからいいんだよ!)

(なら試してみるか!)

(上等だかかつてこいよ!)

(…………それじゃ、私はこの辺で)

もはや、止めても同じ事だと諦めて二人を残して飛び立つた。目指すは雪山の方角だ。  
(…………ところで、雪山つてどっち?)

# 転機

(ここ、どこ……?)

確かに自分は雪山を目指して飛んでいたはずだ。方向は分からなかつたけど大まかな方角なら天藍に聞いたから大きく外れることはないと思つたんだけどなあ……。  
(なんでそこら辺毒の沼地だらけなの……)

どうやら沼地についてしまつたようだ。しかも夜のためかそこら中から毒の瘴気が吹き出して毒沼状態になつてゐる。まあこの程度なら平氣だが、沼地に足を突つ込んだ感覚が背筋にぞくつと来るものだつたためあまりウロチョロはしたくない。

(今日は一晩ここに泊まるかな)

そうと決まれば安全地帯を探す訳で。適当に空から飛んで探してみた結果、それらしき洞窟の入り口をいくつか見つけたためその中で過ごすこととした。中は夜なのに壁に群生している鉱石のおかげか薄く光を放つてるのでそこまで暗くはない。奥に進んでいくと大きな岩があつたのでそこに隠れるようにして睡ることにした。

—————

緊急事態発生か？自覚めた時にふと頭をよぎった言葉だ。朝起きたら隠れていた岩がなくなっていた。すぐに跳ね起き周囲を確認したが、昨日よりも若干見やすくなつた洞窟の中は昨日と同じだった。一瞬自分が別のところに連れて行かれたのかと思つただけに頭をかしげた。すると

(Y.O.!お前ここに来た新人！俺、ここに住む隣人！住むなら歓迎するぜ、友人！Yea h!)

なんかまた濃いのが出てきた。見た感じものすごくデツカいカニだ。ていうかダイミヨウザザミか。よく見るとハサミを振り回しながらチエケラしてこのカニと昨日寝る前に見た岩が似てることから岩が消えたのではなく、このダイミヨウザザミが移動していくだけだとあたりを付ける。

(D.J.、その辺りで止しておけ。これ以上客人に粗相を働くくな)

(分かったY.O.、友人！俺座るぜ、静止！)

チエケラザザミの相手をしてると反対側から今度はザザミによく似た青い甲殻のカニが出てきた。こつちはダイミヨウザザミと対になつてよく発見されてるショウグン

ギザミだろ。なんか雰囲気というか、喋り方も将軍ぽいというか古い感じがする。

(いきなり驚かせたようではすまない。拙者は弦と申す。其方の名前を教えてもらつても  
良いか?)

(は、はい。ルミナスって言います)

(Y.O.!俺つちD.J.!好きに呼んで、イイゼー!)

(私のことも好きに呼ぶがいい。そう固くならずにな)

(はい、よろしく弦、D.J.)

（ところで、拙者の記憶違いでなければ其方のようなナルガクルガはついぞ目にしたこ  
とがない。もしや何か事情があつたのか?）  
(事情……というか、なんというか……)

(Y.O.!説明しずらい、平氣!俺たち友達、元氣!話してみろよ、勇氣!)

なんかすごい場の空気をガシガシ壊してるのでD.J.さんの底抜けな陽気さに文字通  
り勇気をもらつた気がする。だから初めてだけど打ち明けようと思つた。  
(……実は、私、モンスターじゃないんです)

(それはどういうことだ？其方は見る限りナルガクルガであるが）

(見た目はそうですけど……本当はもともと別の世界にいた人間だつたんです。でも気がついたらここにいて、モンスターになつてて)

(モンスターになつてる、奇想天外！原因不明、奇々怪々！）

(D Jの言う通り、これまで人がモンスターに成つたという言い伝えや噂は耳にした試しがない)

(そう……ですよね。すいません、こんな事信じられませんし、自分でも正直始めは不思議に思つてたんです)

(それが正しい反応だ、しかしこの世の中に意味なき事はない)  
(……えつ？)

(拙者がこの世に生を受けた事も何か理由があるはず。拙者とD Jが巡り会えた事も理由があるはず。ならば、其方がこの世界に来た事も何か理由があるはずだ。推論ではあるが）

(いえ、そう考えてみたいです）

(そうだ、持つものは希望である方がいい、それに拙者達も何かあれば其方に助力しよ  
(有難うございます！)

(Yō! 僕知つてゐる、教養！元に戻るかもしけない、方法！)

(ふむ、真か？)

(お、教えてください！)

(Yō! ここから遙か遠く、上空！西に広がる、大陸！言い伝えられてるぜ、伝説！巨大な化物、常駐！倒せば願いが叶うかも、成就！Yeah!)

(何処からその様な伝えを聞いたのだ？)

(たまに来るぜ、アイルー！いろんな情報、伝える！)

(ふむ、ならば西の大陸に行けば其方の願いも叶うやもしれぬという事か)

(分かりました、西の大陸に行つてみようと思ひます。弦さん、DJさん有難うございました！)

(案ずるでない、拙者達は何もしてない。ただ其方に道を示しただけだ)

(Yō! 寂しくなるぜ、悲しい！でもお前の願い叶う、嬉しい！)

(またここに来たくなれば来るがいい。拙者達はここに居座つておる故、会おうと思えば会えるはずだ)

(分かりました。本当に有難うございます！)

# 新大陸

## 古龍渡り

現大陸から遙か彼方に存在すると言う新大陸に向けて古龍が渡りをすることからそういう名付けられられた。昔から観測されていたその現象は、現在急速に周期を縮めていると言う。

これを鑑みて、40年前。ギルドより正式に古龍渡りを調査する為の組織が結成された。

## 名を新大陸古龍調査団。

その第一期団が追つたクシャルダオラを追いかける様、また一頭と古龍渡りは続いた。その度に調査団は新大陸へと派遣され、島の生態系や各種モンスターの特徴、そして古龍渡りの謎を解明すべく調査に当たった。

## 結果から言えば、空振りだったといえよう。

古龍渡りが行わるとは言え、その動向を常に観察することは困難を極めた。古龍は自然の猛威の化身。それに対しても常に張り付く事などハンターであれど想像を絶する

難易度だつた事だろう。

実際に第一期団から四期団に至るまで目標とした古龍の観測は途切れ、行方不明となつてゐる。

しかし、今回観測されたのは今までにない規格外のモンスターであつた。

また、これまでの古龍とは違ひ移動速度が鈍重。かつ団体も低い山ほどある巨体だつた為比較的追跡が容易だつたのだ。そこでギルドはこの機に乗じて第五期団を派遣することに決定。古龍渡りの謎に終止符を打つ事を決めた。

こうして新進気鋭のハンター達を乗せた調査船は新大陸へと向けて就航した。そんな船室のとあるテーブルにて

一人の編纂者がハンターに振り回されていた。



「編纂者よ、まだ到着しないのか？」

「…先ほどから何回目ですか？もう耳にタコができるくらいには聞きましたよ」

「だがそれでも待ち遠しいのだ！わら…私の実力を試すことができるのだからな！」

そう言つて落ち着かない様子で少しだけ開けた窓枠から外を眺めるハンターに編纂

者の女性は、今日何度目とも分からぬ溜息をついた。

きつかけは些細な頼み事からだ。元一期団の祖父に快諾され新大陸の調査団に参加したのだが、そこでとある少女を紹介された。曰く、彼女の付き添いの編纂者として調査団に参加して欲しいとの事。彼女としても相方がいるのであればと快く快諾した。まだ新米だが腕に関しては問題ないと事前に説明されたことも理由に当たるだろう。

しかし、それを抜きにしても彼女は些か、問題児であつた。

元々何処かの貴族のお嬢さまだつたのか、彼女の行動原理には規則性があまりない。有り体に言つてしまえば自由奔放過ぎるきらいがあつた。

街に行けば見知らぬ商品に釣られ、現大陸で腕を見るとフィールドに出ればモンスターに釣られ素材に釣られ。果てはアイルーの巣に単身突撃する始末であつた。

この時から既に頭の中にはこの先待ち受ける苦勞がありありと思ふ浮かんではいたが今更後に引き返すわけにも行かない。こうして、自由奔放な彼女と相方になり新大陸へと向かうことになつたのだった。

「新大陸に着いたらまずはどこに向かうとするか」

「フィールドワークはいいですけど、私たちの目的もお忘れなく」

「分かつておる。古龍渡りの謎を解明するのだろう？それなら問題ない！」  
「理由を聞いても？」

「ふふん、私は既に古龍と深い関係を結んでいるのだからな！」

「……何度も聞きましたけど、古龍が人間に對して友好的と言うのが信じられないですね」

「私の話が嘘だとでも言うのか!?」

「いえ、そう言うわけではないですよ。過去に古龍の姿を間近で見た方に話を聞いたことがあるので、そういう事がないとも言い切れないですが」

しかし、少女はあろう事か古龍の背に乗り空を飛んだと言う。流石にそれを鵜呑みにすることはできなかつた。と言うか純粹に信じられなかつた。

「やはり信じていらない様だな」

「そりやそうですよ。そんな事ができるなら私も乗せてもらいたいくらいです」

「それなら問題ない！蜂蜜さえあれば乗せてもらえると思うぞ！」

「蜂蜜ねえ…」

編纂者の頭の中には少女の持つてきた蜂蜜を食らう古龍の姿は思い描けなかつた。自然の猛威とまで言われるモンスターが蜂蜜程度で大人しくなるのか？

「どうか、今まで教えてくれなかつたんですけど。その古龍つて一体なんて名前なんで

すか？」

「仕方ないなあ。いいか、あの古龍の名はナ

と鈍い音を立てて船が揺れた。いや、揺れたのではなくナニカに座礁したのだろう。現に今もゆつくりと船が持ち上がっている。少女に目をやると一目散に甲板へと上がり姿が見えた。危機に対応して即座に行動できるその姿勢は見習いたいところだが、安全に関しては何処かにかなぐり捨ててきたらしい。

本日何度目かもわからない溜息を吐きながら編纂者はその背中を追つて駆け出した。



(西の方つて聞いたけど全然それっぽい大陸がない…どこまで飛べばいいんだ…)